

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



3

第八十一卷第三号  
日本幼稚園協会



# 保育者への推薦図書！！

## これからの保育(全6巻)

●あなたの保育を深め充実させます。

大場牧夫・海 卓子・平井信義  
本吉圓子・森上史朗 共著

A5軽装判・各256頁・セットケース入り

セット定価 9,600円

「保育」を原点にもどして考え直し、子どもたちの自主性の発達を助きたい。自由で生き生きとした保育を目指して保育者自らも高まりたい。

シリーズ「これからの保育」は、

- 1巻「遊び」とは何だろう
- 2巻「自由」とは何だろう
- 3巻「課題」とは何だろう
- 4巻「生活」とは何だろう
- 5巻「集団」とは何だろう
- 6巻「総合」とは何だろう

という命題について実践をふまえて重ねた討論から問題提起します。

## 戦後保育史(全2巻)

●日本で初めての生きた保育史です。

編纂 岡田正章・久保いと・坂元彦太郎  
穴戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗

A5上製本・1巻580頁・2巻512頁・各巻ケース入り

セット定価 9,800円

戦後から昭和51年までの保育界の流れを幼稚園、保育所、幼児文化の三つの側面からとらえた我が国で初めての戦後保育史です。文部省、厚生省の施策や保育カリキュラム、文化財の変遷等豊富な資料と証言をドキュメントに紹介しています。

第1巻(昭和20年～37年)

幼稚園とその保育 保育所とその保育

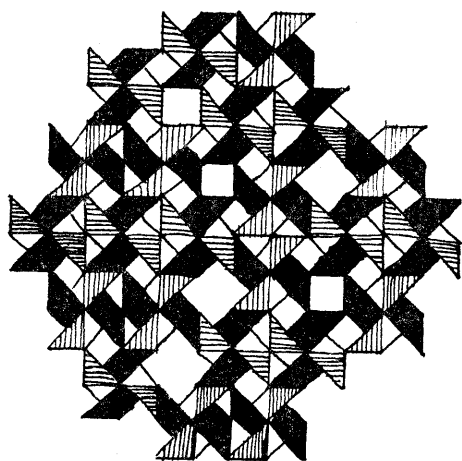
幼稚園と保育所の関連 学術文化

第2巻(昭和31年～51年)

幼稚園とその保育 保育所とその保育

幼稚園と保育所の関連 学術文化

# 幼 児 の 教 育



第八十一卷 第三号

# 幼児の教育 目次

——第八十一卷 三月号——

© 1982

日本幼稚園協会

過ぎたるは.....日名子太郎(4)

私の幼児教育論.....間藤 侑(6)

入園児をもつ母親から.....菊池 慶子(13)

菊池 まり(15)

富岡多恵子(17)

入江礼子(19)

母の故郷 ①

——福永津義・人間とその仕事——.....高橋さやか(22)





日本における最初の私立幼稚園とその背景 ②

近藤はま(浜)と近藤幼稚園(その二)……………小林恵子…(29)

続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑫……………守永英子…(38)

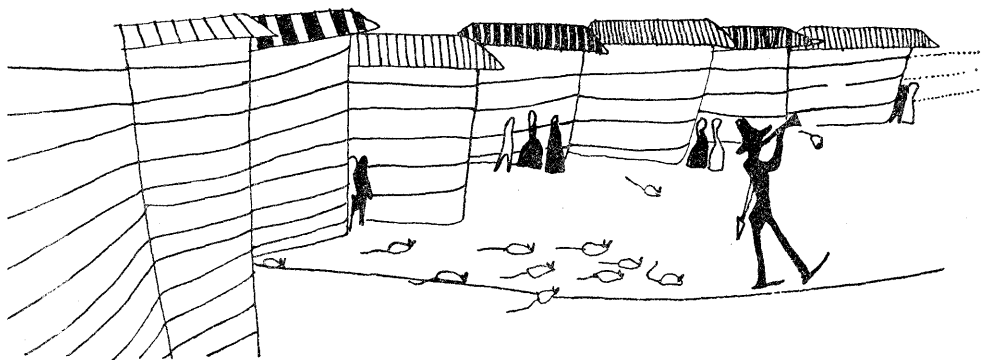
イギリスの幼児教育……………中村英勝…(41)

ブリュッゲルの「子供の遊戯」 5

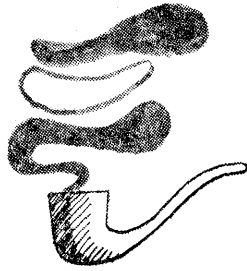
——輪回しからお店屋さんごっこまで——……………森 洋子…(46)

「周郷博先生追想集」に寄せて……………村石京子…(61)

表紙・うすい・しゅん  
表紙題字・比田井和子  
カット・福田理恵



## 過ぎたるは



日名子 太郎

一昨年は、お隣りの中国、そして昨年は、去る十一月の下旬に、マレーシア、シンガポール、そしてインドネシアと児童福祉関係調査の為の旅をした。かつて、インド、スリランカなどを歩いて、すでに、いろいろと感じたことではあったが、当時よりもはるかに高度経済成長をした日本を背景に見ると、一層、感じさせられるところが多かった。

まず、第一は、人口の問題である。中国、インド、インドネシア、シンガポールなどは何れも人口過多に悩んでおり、その人口の多きが故に、容易に近代化も出来ず、ジレンマに悩んでいる状態はまことに深刻である。ところで、つい先

日、わが国の今後の人口推計が発表され、将来、無類の老人国家になるという、全く、前述の国々とは異なつた問題を蔵しているのがわが国である。そして、出生児数の極端な予測以上の減退は、子どもに関係のあるあらゆる分野に深刻な影響を与えつつあるし、将来を考えた場合、必らずしも好ましいことではないのはいうまでもない。

第二は、わが国の産業・経済界の進出のすさまじさである。走る車も、走っている道路も、その沿道の建物も、あれもこれも皆、日本の会社によるもので、よくもここまでと思うが、その反面、その利潤の一部を、その国に還元してやる

ことを知らない日本人の利己的な考え方には大きな疑問があるし、同時に日本人が自からの生活状態の恵まれていることを認識しようとしないう態度にも疑問が度々うかんだものである。そして、この事は、次の第三の予想以上の発展途上国の貧困さと、貧富の差という問題につながってくる。想像もできない程の低い賃金、高い失業率、それに原因する就学率の低さそして文盲の多さは、驚くほどである。アメリカが、貧困対策、つまり社会改革の一つの手段として、ジョンソン大統領以来、ヘッドスタート計画、フォローアップ計画と多額の費用と人材を投入して行なつて来た幼児教育プロジェクトは、その成果の程は兎も角として、その構想の大きさ、多様さ、そして副次的効果の大きいことは眼をみはるばかりであるのだが、それと同じようなプロジェクトが、インドネシアで婦人役割担当相 (Minister of the roll of women) の下で、P・K・Kとよばれる社会運動と結びつけて、始められていることは、注目すべきことである。しかも、それについてのレポートをユニセフの依頼で、前述のヘッドスタート計画に参加したアメリカのニムニヒトがまとめているのも興味深いことである。

さらに、わが国のように単一民族、単一言語を持った島国の集中豪雨的行動型をもつ単細胞人間としかよびようのない日本人の考え方から見た場合、不思議にすら感じられる多民族、多言語、多宗教で国家が成立しているということもきわめて興味のあることであつた。それと同時に、同行したわが国の行政畑の方々が、人間的には皆きわめて立派で、よい人々であるのに、不幸にして行政畑にいる、又はいたが故に、ものごとのとらえ方が、画一的で、一つの日本の尺度でしかできないという不幸な事実も、より以上に私には興味をひく点であつた。私のように小学校以外、国と名のつくところや公立的な学校にも、職場にも団体にも全く関係したことのない、しようとしないう人間には、やりきれないうな考え方が日常性になつて了つてゐることは、一つの恐怖をすら感ぜしめるほどであつた。

そして考えた。わが国は、このままで行くと世界の孤児になり、太平洋の一隅で漂流しなくてはならなくなるのではと……。それもこれも、日本人の集中豪雨的行動型と過ぎたるは何とやらのたえのうな公費依存型思考人間の増加に原因がありそうに思えてならないのである。

(玉川大学)



# 私の幼児教育論

間

藤 侑



## 一、あるエピソード、または価値の相対性

プール開きも近い七月のある日、年長児は、水遊び用のプールで顔を水中につける競争を始めていた。Mは、内気で動作ものろく、いつも人の後に従う目立たない子であったが、そのMが、顔つけ競争では何と第一位だったのである。彼にとって、人生始まって以来の出来事かもしれないが、幼児は、おとなのようにレッテルにこだわらない。ストレートにその価値を評価し、驚きを表現し、彼の中に秘められていた力を承認する。周辺児だったMは、秋に測定されたソシオメトリーでは、立派

に一つのグループの成員の地位を獲得していた。こうして徐々に自信と積極性を加えていった彼は、生来の人の良さにも支えられて、かなりの人気者になって卒園して行った。たった一つの事件が、彼と友だちを変えたのである。

他方、いつも男女にまたがるクラスのリーダーを自他共に認めるSは、逆に、もしかすると生まれて初めての屈辱感、挫折感を味わっているようであった。彼女は、自分を励ましては何回も挑戦するのだが、水への恐怖が先立ち、ほんの瞬間しか顔を水につけられない。周囲がそれぞれ自分なりの力を試し、競い合い、歓声をあげて

いる中で、Sだけはいつのまにか誰にも忘れられている孤獨な真空の中で、自らへの口惜しさを噛みしめているようであった。しかし、強い性格であった彼女は、自分の中にあつた弱さを発見しても、言いわけや負け惜しみを考えず、その事実から目をそらさずに立ち向かい、そのことに耐え、やがてその挫折感や内的葛藤をのりこえて、いつもの彼女らしさをとり戻していく。おそらく、自分の弱さを初めて知ったことは、他者の弱さへの思いやりを育てる貴重な体験となつたことであろう。

この二つのエピソードは、私達にいろいろのことを教えてくれるような気がする。例えば、顔つけという客観的にはどうということもないようなものでも、場面により人により、こんなにも大きな重さをもち得るという、ものの価値の相対性を学ぶ。

私たちは、しばしば、こういう事柄はとても大事だから是非体験させてやりたいとか、これは「望ましい」経験や活動である、などと考える。この水中顔つけという活動も、水泳指導の前段階として必要な、水慣れの一つ

としてとりあげられたものである。保育案では、予想される活動として、がんばる子、顔をつけられない子なども記されている。そして、それに対する教師の援助活動としては、励ましてやる、賞めてやるなど自信をつけさせるようなことばがけをする、などと書かれている。しかし、この保育案を作成している教師の頭の中には、体験させたいと思う理由も、「望ましい」経験や活動の一つであるという考えも、すべて水泳という具体的な目標と関連させてだけだつたにちがいない。このことは、他のほとんどすべての日案、保育案についても言えることであろう。そして、それ自体は決して誤まではないし、大部分の幼児についてはそれでよいとも言える。だが、この場合、少なくともMとSの二人については、全く異質の意味と価値をもたしたのである。

しかし、どんなに大切な意味と価値を内包するできごとであったとしても、教師がそのことに気付かず、あるいは気付いても深く考えずに放っておかれたならば、おそらくその意味は、「時」を失い、実を結ぶことなく枯

死してしまふであらう。現実の保育の場には、こうした偶然のもたらす予測しがたいできごとがいくらでも生ずる。その時教師が、自分の（考えや保育案の）絶対性や權威性を思わず、自分の善意への信念などに固執せず、高い価値を内包すると思われる偶然に鋭く気付いてその意味を測り、保育過程の中に「必然」としてとり入れるという、敏感でしなやかな感性の持ち主であつたなら、このように幼い年令においても、人生の、あるいは人間の、本質的なものに触れるような深い教育さえ可能なのではないかと思う。

さらに、特にSの事例は、マイナス（自分にとって失うものがある）と思われる体験は、反面、プラスの意味に転化できる可能性を内包する（当然その逆の、得るものがある時には失うものがありうる）という、体験の相補性を教えてくれる。そして、あらゆる矛盾し合う事象（例えば個と集団、自由と統制、意識と無意識など）は、実は相補的に作用し合つてバランスを保っているのだというユングの考え方が、保育の場においても大きな意味

をもつことに気付くのである。

なお、先に述べた二つのエピソードから、もう一つ私たちは、「時」のもつ意味を知る。人や事象はみな、時計で測りうる時（クロノス）の他に、それぞれ固有の「時」（カイロス）をもっているという考え方がある。例えば、大部分の幼児は、幼稚園のクロノスに自分のカイロスを合わせているが、不適応児などは、自分自身のカイロスに生きているために皆と歯車が合わないのだと考へることもできる。また、誰もカイロスの進行を知ることとはできない。しかし、先の例のように、生活の中で時々、偶然何かが起こることがある。そして、その起こつたことが、それまでに作られてきた自己イメージを激しくゆさぶり、自己変革をもたらすきっかけとなることがある。森有正は、後述するように、それを、単なる体験を経験へと高めるものと言ひ、ユングは、その見かけの偶然を、クロノスとカイロスの必然的な交錯と見て、「共時性」という概念を導入している。保育の場は、一斉指導の場であらうが、自由な活動の場であらうが、そ



の「時」に満ち満ちているのである。

## 二、幼児教育の神話または「経験」の意味

幼児教育の方法論としての基礎が実践活動にあることは、幼児期の特性に適っている。しかし、それが拡大解釈され、すべての子に同じ体験や活動を与えてやらないと保育が適正でないなどと考えられたりする。こうした体験主義は、高校全入論などに見られるように、幼児だけでなく、小学校から大学にいたるまで、学校教育への考え方の中に根強く存在している。しかし、共通体験は共通の何かを蓄積させていくにちがいないという神話（あるいは信念）は、経験的に見てもきわめて疑わしい。

先年他界した哲学者の森有正は、体験と経験を明晰に峻別している。体験とは、偶然的事象（例えば教師が意図的に与えるものであっても、幼児にとっては偶然的事象にすぎない）との接触到にすぎず、それによって我々が変わるといふこときものではない。それに対して経験とは、「ある根本的な発見（心理学的に補足すれば、意識的

にも無意識的にも）があつて、それに伴つて、ものを見る目そのものが変化し、また見たものの意味が全く新しくなり、全体のペルスペクティヴが明晰になってくることなのだ」とし、あるいは、「新しいものを自己の体験で理解しうるものに变化させようとする（自己の内にある）傾向（つまり狭い主観性）」に徹底的に抵抗し、こうした安易さを克服する積極的・挑戦的な姿勢で、「（内的な）促しに従つて自己を求めていく時に堆積してくるものが経験」であり、そうした意味で、われわれは経験的存在なのだと述べている。これは、ユングのいわゆる自己実現や個性化の概念と同じ視野をもつものと考えられる。

こうして「経験」ということの意味を深く考えてみると、いろいろな疑問が湧いてくる。例えば、非常によく使われる「望ましい」経験や活動という半ば神話化した絶対性をもつ言葉である。この望ましい経験や活動と言われるものは、元々、経験を通してかなり恣意的に作られてきたはずのものであり、必ずしも発達のメカニズム

という視点から検証されてでき上がったものではない。むしろ、その具体的な内容や、何のために望ましいのかという理由づけは、小学校教育に直接結びつくような色彩が濃い。しかし、先程の水泳指導の場のエピソードにも見られるように、少なくともSとMについては、その望ましさは、本来の目的とした望ましさとは異質の、むしろ、目には見えにくい心情的な内容として把握された。しかも、人間としてのより本質的な変容につながる「経験」となり得たのである。

つまり、「望ましさ」を、目に見え、評価もしやすい目的なものとして考えるか、あるいは、目に見えにくい心情的で、「経験」化過程を内包するものとして理解しようとするかでは、全く異なってくる。もちろん前者が結果的に後者を含むこともあり得るが、それよりもむしろ、後者が前者を含む方がより望ましいと考える。例えば、先の例で言えば、MもSも、より本質的な意味での「望ましい」体験（経験化につながった）をしながら、結果的には、教師の最初求めた水慣れの目的も達成でき

たのである。こうして考えてみると、少なくとも幼児教育の場では、従来のような意味で「望ましい」と使うことには、いささか疑問を抱かざるを得ない。私たちは、「望ましさ」の意味やその具体的内容について、もっと議論してみる必要があるように思う。

ところで、このように、ある意味で聖域視されていた「望ましい」経験や活動あるいは共通体験などを、根本から疑ってみた場合、では何を支えとして保育を展開するのかという問いが切り返されてくるかもしれない。しかし、その答は簡単である。何も必要ない。なぜならば、そこに子どもがいるからである。それで充分と言える。

子どもたちの生きる宇宙に身を投じさえすれば、教師が何をすべきで何はすべきでないかを、子どもはちゃんと教えてくれるだろう。極論を言えば、倉橋惣三もフレールも知らなくてよい。自らの狭い主観性を捨て、さまざまな個性を生きている子どもたちをあるがままに受けとめていく過程の中で、自分自身が倉橋にもフレール

ルにもなり、さらには、実践的に彼らを超えることさえありうるのではないだろうか。

私たちはすぐ、文部省がどう言っている、教育要領にどう書いてある、倉橋惣三がどう説いている、あるいは○○先生がこう述べているなどと、先ずそうしたもので武装してから、どっこいしょと子どもに向かつていく傾向がある。しかし、それもまた体験主義以外の何ものではない。先ず、経験的存在としての自己がきちんとなければならぬ。その上で自己の内的闘争を通して先人の理論が自らの中に経験化されないかぎり、どんなに知識を積み重ねても、自らを変えるほどのものにはならず、かえって変ったという思いこみの方がこわい。むしろ素直に自分を差し出し、子どものあるがままの姿に感動し彼らに学ぼうとする姿勢の方が、保育の本質に触れるにはずっと早道であるような気がする。

### 三、「幼児の教育」または「狩人」としての教師

それでは、安易な体験主義を排した、経験の深化につ

ながる（つまり自己実現的な）保育とは、どういうものなのだろうか。

それは、一口に言えば、一人ひとりの子がその子の個性（森流に言えば経験的存在としての自己）に基く求めに応じて、全力を投入して熱中できるような場（精神的な意味でも）が用意されている保育であると言うことができるだろう。（もちろん、毎日毎日が熱中の連続ということはあり得ないだろうし、個々の、活動と休息、熱中と沈静というリズムも大切にされなければならない。）幼児は、一般にまだ課題意識も未熟で外発的動機づけの力は比較的弱く、好奇心などによる内発的動機づけが支配的である。したがって、共通の教育目標のようなものを前提として一斉指導をするような保育形態では、すべての子の活動への熱中を保証しがたい。だから、幼稚園や少なくとも小学校低学年くらいまでの教育は、統制的・画的であるよりは、原則的には時間的にも空間的にも（小学校なら教科的にも）、集団として、より自由度の大きいものを保証した方が、個々の自己充実・経験



化という点で、より効果的であると言い得る。

また、こうした保育形態は、さまざまな個性の子どもたちがより生きやすくなる。例えば、集団に対して不適応な子も、教師や周囲を悩ます子も、自らの「時」の熟するのを待つことを許されうる。能力的にはハンデを負わされている障害をもつ子もまた、健常児と対等に生きる場をもつことができる。当然なことだが、おちこぼれなどという言葉は存在の意味を失う。なぜならば、一人ひとりが、熱中するものを見出し、そこで格闘し、自己充実感を味わい、時には挫折しながらその負体験をプラスに経験化して大きく成長するなどというより本質的なものの体験を重く見ていくからである。もちろんその過程の中で、目に見えて評価できるものも達成されていくのは当然であることを付記しておく。

このように、どのような幼児も、それぞれの「今ある」姿に応じてその存在を肯定されて生き、育てられることを約束されるものこそ、まさに「幼児の教育」なのである。今、私たちの周囲で大きく流れ始めている幼児教育

における第三の流れ（第一は、小学校予備教育、第二は、従来のいわゆる「望ましい経験や活動」を与えようとする教育であると考える）は、理念的にはまさしくこうした考え方に立っていると見るができるだろう。

なお、付記すれば、これは、必ずしも保育の形態（例えば自由保育）にこだわるものではない。大切なのは、その基本的な構えと、それ以上に教師の「在る」姿である。教育が「人対人」の応答的関係の中で進行するものであるかぎり、教師の果たす役割（あるいは責任）は大きい。私は、教師はすべからず狩人であるべきだと思う。狩るものは「時」「意味」そして「価値」。そのためには、しなやか（柔軟で強靱）な感性を養い、獲物の存在をかぎわかる鋭い嗅覚を育てなければならぬ。決して「絶対」の中に生きず、時には偶然の出会いに瞬時に狩り、時にはじつと潜んで待ち、時には執念深く追い続ける。しかし、永遠に追い求め続けるものは本当はおのれ自身なのかもしれない。

（新潟大学）

## 入園児をもつ母親から



菊池慶子

わが家では、長女が卒園、入学、そして次女が入園を  
むかえることになり、その下に二才の長男がおります。

さきごろ、入学予定児童の健康診断が行なわれ、長女と  
共に小学校に行つて参りました。初めてということもあり  
りましようが、先生方の表情や態度、全体の雰囲気など  
から、学校というところは——幼稚園と違って——一般  
社会からはかなり隔絶した独特の世界なのだという印象  
を受けました。幼稚園では、あたたい雰囲気のほかで  
実にのびのびと過ごしている長女ですが、入学すれば相

当に「苦勞」を味わうことになるのではないかと……と、  
小学校の白く長い廊下を手をつないで歩きながら思った  
のです。

もつとも、幼稚園というところも、入園してしばらく  
は、長女にとってかなりの試練だった様です。入園まで  
はごく丈夫でしたのに、入園式から数日後にひどいカゼ  
を引いて十日程も休み、その後も体調もすぐれず表情も  
冴えず、五月には初めて自家中毒というものを起こし、  
高熱が下がらないため三日間の入院まで経験してしまひ

ました。お医者さんの診断では、「入ったばかりの幼稚園での緊張と疲れが大きな原因」ということでした。親からみれば、あれほど優しくあたたかく受け入れてくれる幼稚園で、それほど緊張や疲れがあらうとは想像もできなかったのですが、やはり子どもの感じ方というものは鈍磨した大人のそれとは別物なのでしょう。その後も度々調子を崩し、初めの一年間は本当に休みがちでした。それが年長組になってからは打って変わって元気になり、休むことも全くなくなりました。お友だちも増え、帰宅後も集まっては賑やかに遊びまわるようになりました。どうやら、一年かかって、心身ともにひとつ乗り越えた様です。貴重な体験でした。

親の方も、運動会、バザー、クリスマス等の行事を通して交流が生まれるようになり、そこからまた子どもたちのつながりも深まっていった様です。幼稚園という場を媒介にして人の輪が生まれ、そのひろがりの中で子どもたちも育っていくことの有難さを感じますし、このことはまた幼稚園というものの担うべき大きな役割

だろうとも思います。

ところで、この地方でも、数年前までは、入園申し込みのために徹夜をするというような状態だったそうですが、最近事情は変わり、今ではむしろ幼稚園を“選択”できる段階に來たようです。そんな中で、私共はあえて、次女も長女と同じ幼稚園——街中であって手狭で環境もよくない——に入園を決めました。広々と環境に恵まれたところ、送迎バスのあるところ、保育時間の長いところ、給食のあるところ等々、母親とすれば心が動くような“目玉”を打ち出している幼稚園を選択することもできたのですが、“幼稚園とは何か”と自問自答しつつ、それら“目玉”一切に目をつむり、こういう決定に至りました。この幼稚園は、キリスト教会の付属であってその精神に常に支えられていること、先生方が本当に真摯な態度で接して下さるということが、子どもにとって何ものにもかえ難いと思えたからです。幼いものの心のやわらかさを思うとき、やはり幼稚園には、しっかりした精神的な何か——必ずしもそれが宗教である必要は



ないと思いますが——を期待したいと思うのです。このことの大切さに較べれば、他のことは外で補いのつくことなのではないでしょうか。

次女は幼稚園にも先生方にも既になじみになっており、長女の時のような緊張はなからうとたかをくくっていたのですが、入園面接の前夜、急に頭痛腹痛を訴え眠

れない有様でした。翌日からは全くケロリとしていましたし、どうやら次女も長女と「同病」のようです。こんな子を送り出す幼稚園というところは、やはり優しくあったかい場所であってほしいものです。

(岩手県宮古市在住)



## 菊池 まり

長女を地元の小さな私立幼稚園に入園させて一年半。

特別な設備もなく、狭い敷地に多人数の決して恵まれた環境とは言えない幼稚園ではあるが、そこに来年は長男を入園させることにした。幼稚園に一度も通った経験のない私は、殊更に幼稚園の必要性を感じないできたのだ

が、娘の幼稚園生活を通して、その意義を見出し出ているところである。それらをふり返りつつ、更にこれから入園する子ども達にとっての幼稚園を考えてみることにしたい。

親子だけの核家族生活の中では、気をつけているつも

りでも子どもに対して甘くなる。その一方で手が行き届き過ぎ、更に育児に関する知識や情報の拡大で却って子どもの行動や心の働きまでも無意識のうちに制限してはいないだろうか。少ない家族構成、狭い隣り近所とのつき合い——子ども達が結ぶ人間関係は以前と比べて極端に少なくなっていると思われる。限られた人間関係だけの中では、子ども達の本来ののびやかな成長は歪められてはこないだろうか。人間関係が少なくなれば親とのかわりは実に大きくなってくる。のびのびと育てたい親心とは裏腹に、狭い家の中ではいたずらする前に注意が口が出る。悪いことばや流行のコマーシャルソングに眉をひそめる。思う存分けんかをさせておけない——等々、「わんぱくでもいいは建前で、日常生活の煩しさの中で果たして私達は子どもとどんな接し方をしているだろうか。ところが——幸いなるかな!! 大勢の小さな仔羊（仔豚!）達は集まることで本来のわんぱく振りを発揮し出したのである。幼稚園という場に集まり、大勢の仲間を得た子ども達の毎日は、いたずらをやり、悪い言

葉も使い、真似をして喜び、けんかをやり、意地悪をしたりされたり——生き生きして来たのである。子ども達の中にはいくつかのルールも生まれ、リーダーも出てくる。子ども達が作る多様な人間関係である。この様な状態になるには勿論多少の時間もかかったが、何よりもそれを見守って下さった先生の存在（幼稚園の方針）に依るものと思う。子ども達のうちから湧き出る行動が素直に表に出せる雰囲気が必要である。更に、子ども達のやることに神経質に反応せずに、場合に依じて、見過す、おだてる、怒鳴る、廊下に立たす——などの態度は却って子ども達に大きな安心感を与えていると思われた。

また幼稚園生活の大きな柱である季節の諸行事、各種の当番やらお弁当時間などを通して少しずつ生活のリズムというものを体得していつていることも忘れられない。

幼稚園の本来の目的は何であったのだろうか。果たしてよくわからない。唯、親として望みたいことは、子供達の成長をじっくりと大きな心で受けとめてくれる社会

という存在の第一歩を担ってほしいということである。是否は別として現代は子どもに早期の成長を余議なく迫っている。小学校にもその波は押し寄せていると言わざるを得ない。十二分に機が熟するのを待っていては落ちこぼれの烙印を押される時代になっている。この問題に關しては多くの議論が必要ではあるが、とにかく、この間違った現状に警鐘を打ち鳴らすのは幼稚園のあり方だ

と期待している。幼児期にはそのときにやるべきことを思う存分やらせてみたい。幼稚園での絵画、歌、遊戯は、各々の子ども達の心や感情の表現のきっかけになればよいのだと思う。

子どものうちから湧き出るものを、そしてそののびやかな成長を、幼稚園と共に見守っていけたらと切に望むものである。  
(千葉市在住)



富岡多恵子

我が家の娘は、近所に同年令の子供が少なく、又、遊び場になるような公園もないため、友達遊びも限られた範囲だけで、時間的にも子供同志で遊んでいるのは、一日平均一時間程度にすぎません。あとは、幼い弟を相手

にして遊んだり、絵本を読んだり、散歩や買物に出かけたりの毎日です。よそで、子供同志楽しげに遊んでいるのに会うと、自分も一緒に遊びたくて、遊びたくてウズウズしています。従って、「来年から幼稚園よ。」と言う

と、「幼稚園に行ったら、お友達がたくさんできるんでしょう？」と言って、ものすごく楽しみにしています。

親としても、幼稚園に行くようになったら、友達もできて、暗くなるまで外で、かけずりまわって遊ぶような子供になってくれたらと期待しております。

こんな現状ですので、幼稚園の先生方には、次のようなことを期待しています。第一に、「おともだちができる。」と大きく胸をふくらませて、幼稚園を楽しみにしている子供が、期待どおり他の子供達の中にスムーズに溶けこみ、楽しい時間を持てるように手助けしていただきたいということです。大人の目から見ると、子供達の世界というのは、決して美しく美しい世界ではなく、無邪気ゆえの残酷さや幼いながらも力の関係があり、そういう世界は、時には大人が軌道を修正してやらなければいけないのだらうと思います。その軌道修正の役をお願いしたいのです。人生最初の団体生活において、「皆といるとこんなに楽しいんだ。お友達って良いものだ。」ということが、どの子供にも実感されたら、どんなにす

ばらしいことかと思えます。人間同志の交流の楽しさが根底にあつてこそ、それを維持しようという欲求が生まれ、そこからきつと相手に対する思いやりとか、自らの我が儘を押えることとかを、具体的な形で学んで行くでしょう。

第二点は、近ごろ幼稚園の時から、漢字や和歌を覚えさせたり、算数や英語を教えたりする所が多いけれど、そのような教育は、子供が興味を示すならば意味があるのかも知れませんが、本来子供が持っている好奇心や活力を大切にして、それを満足させ、伸ばすことに力を傾けてほしいと思います。英語や漢字でなくても、手近な自然や日常生活の中にも、いくらでも教育の題材は見つかるだらうと思います。例えば、教師が自らのスケジュールで子供を動かそうとしている時、外を眺めていたある子供が「あれ？ どうして昼間なのにお月様でているの？」と聞いたとします。純粹に子供らしい好奇心から出たこういう問いを、聞きながさず、その興味をさらに伸ばすように、指導して下さったらと考えます。それに

よってスケジュールの方は、思いどおり進めることはできなくなるかも知れませんが、子供達は、何ごとにも興味を持ち、知りたいと思い、それを大切にする事によって、今の学校教育に欠けている勉強への真の動機づけも可能になるのではないだろうか。

第三に、少々理想論になるかも知れませんが、このようなことを実現するためにも、幼稚園の教師は、ぜひ、

子供達を客観的に見つめることのできる、児童心理学その他の専門家であってほしいと思います。それも、子供に對するあふれるような愛情と興味を基盤とした。教師と言えども人間である限り、様々な欠点は免れないでしょうが、せめて、それをしょっちゅう省みて、「明日こそは」と考えるような人であってほしいです。

(静岡県伊東市在住)



## 入江礼子

それは冬の日の夜のことでした。娘(四才)と息子(二才)をそれぞれお風呂に入れ、パジャマに着換えさせ、私も着がえている最中に、突然玄関のブザーが鳴ったのです。飛んでいくこともままならず慌てっていると、

娘が「あやちゃん見てくるよ。」と言ってドアを開け、やって来た新聞の集金のおばさんと何やらやりとりし、「新聞代だって。」と言って戻ってきました。私はとっさにお財布からお金を取り出し、「あやちゃん、これをお

ばちゃんに渡しておつりをもらってね。」とたのみまし

た。娘は大ニコニコで「うん／＼」そして何秒か後に、「ママー、おつりもらったよ。ほらっ」と大事そうに持ってきた。「あらっ、ありがとう。とっても助かったわ。」と言うと、「あや、ちゃんとおつりもらえたんだよね、もう大きいんだもんねえ。幼稚園に行かれるんだよね。」と言うのです。「もちろんよ。」と私。「うわーっ、バンザーイ。幼稚園に行くんだーっ。」と娘は、部屋中をかけて回りました。

幼稚園の入園が決ってからというもの、娘はこの例のように何か出来たりして、自らのことを大きくなった、成長したと実感出来た時、必ずといってよいほどこの日のように「幼稚園に行くんだもん／＼」とか「大きいから幼稚園に行かれるんだよ。」というように、幼稚園の入園と結びつけて、その成長感を味わっているようでした。

ところで、娘の成長感と結びついた幼稚園像とは裏腹に、母親の私は、今迄思いもかけなかった感情を味わっ

ています。

私の現在住んでいる地域も、今の状況を反映してか以前のように入園のために列をつくる必要もなく、希望する園に入園出来るようになりました。幸い通園出来る範囲にいくつかの幼稚園があり、自分の考え方に近い園を選ぶことが出来ました。私の選んだ園はキリスト教主義の自由保育を園の基本方針にしており、自由保育の園を希望していた私にとっては、それは幸いなことでした。

けれども入園説明会やら何やらで園長先生のお話を伺ったりするうちに、大筋では考え方が一致していても個々細かいことになると、やはり色々と違う把え方をしている部分もあると感じるようになりました。その小さなギャップを入園してから埋めていかれば良いと思いつながら今日に至っています。親の立場からみると幼稚園側の気概やら自負もよくわかるのですが、それを表面に押し出されるあまり（この園は私立なので、それが当然といえは当然なのかもしれませんが、しかし……）親としてはちょっとずれると思う考えがあっても、その持つ

ていき場がなくなり、気持ちの中にモヤモヤをしまい込んでしまう結果になります。私が幼稚園の保育者の立場にあった時にはやはり、自分のやっていこうとする保育に理想があり、この園を選ばれた親御さんにはそこを理解してもらおうという気持ちの方でいっぱい、親の方にも言い出したくても言い出せない気持ちがあることは、あまり気がつきませんでした。勝手といえば勝手な気持ちの動きなのですが、自分の気持ちに正直に耳を傾けるとそういうことになるのです。更に親にはこういう不安もあります。つまり四年間、一応自分の手元に置き、自分の手の届く範囲で子どもを見つめてきた親にとって、子どもを幼稚園に出すということはいくら考えが似ているとはいえ自分の手の届かない価値の違う世界へ出すということです。

こういう気持ちやら不安をかかえた親が望んでいるこ

☆

☆

とをひとつ書かせて頂こうと思います。それは、そういう世界で、子ども達はどのように生活していくのか、出来ればすこしでも知りたいということです。園での生活は、親と離れて、親元にいる時とは違った自分を発揮出来る場所でもあり、その一部始終を知ろうというのはありません。ただ日々の保育の中での出来事に対して、それに携っている保育者の方がどのように考え、ふるまわれたかの一端でもお知らせ頂けたらと思います。そのことで親も安心して子どもを手離し、たとえそこに考え方、ふるまい方の相違があっても、それはそれとして認められるように思えるのです。

幼稚園入園は、子どもにとっても親にとっても期待と不安の入り乱れた画期的な出来事であるのです。

(千葉県市原市在住)

☆



# 母の故郷①

——福永津義・人間とその仕事——

高橋 さやか

## 〔前言〕

母のことを書いてみないか、と多分に好意的な申し入れを頂いた。いろいろ引込み思案もあつたけれど、有難いきもちもあつて、書かせて頂くことにした。

母子二代の保育者は、他にもすぐれた方が少なからずいられると思う。娘の立場で母のことを書くのは、必ずしも当を得たものにはなり難いかとも思う。

今になって思えば、私は、母を他人にわたしたくなかったのだ、……子どものころ、親しい知人から「あなたたち子ども

にはご自分のお母さんの偉さがわからないでしょうけど……丁度富士山のとつべんにいる人に、富士山の高さがわからないように」と言われ、「富士山を麓から見ている人に、どうして富士山がわかるのか、富士山の山頂に立つ者こそ、山に居てこそ、本当のその山のことがわかるはずだ」と、口には出さず、胸の中で言い返し思い募ったものであった。

面映いのをあえて言えば、たしかに私の母は、多くの人々から——周辺の、多少とも交わりをもつほどの人々から、親愛され敬重されていたし、それだけの人間味を十分にもって

いた。みんなが頼りにし、悩みごとをうち明け、考え方のよりどころを求め、助けを得るために、母の許に出入りした。それは、実の子女たち（つまり私を長姉とする弟妹）にとつては、多少とも迷惑な、というより腹立たしい事実だった。「私の母なのに、いつもあなたたちは、私の母を奪ってしまっている」そういう不平を抱きながら、次第に、私は青年期をむかえたようである。

本当は文学——国文学に進みたかったのに、保育の仕事から離れられなかったのは、結局母を他（ほか）に離れたところから見るような場所に自分を置くわけにはゆかない、と思ったからのようなのである。

それには、やはり子の側の我ままであり、本当の親思いのわざではなかったかもしれない。いつまでたっても、母のふところの広さ深さには至り得ないようである。

ただ、書くことだけは、いくらかなり母を満足させ納得させたことが、生前にも多少はあった。60歳前後ころから、よく原稿の代筆をしたが、三こと四言要点を言われて、四百字五、六枚はさらに、二、三十枚くらいを書いたことも幾度かあった。書いて「これでどう？」ときくと、「ああ、その通りよ、自分で書くより思った通り書けている」といってくれ

たものであった。私の方でも、自分の文とは別に、できるだけ母の口ぶり書きぶりに似るように、若干の心づかいはいはしたつもりで、しかし努力以上に母は満足してくれたようであった。それは私の書き上手であるより、母の優しさと素直さであったのであろう。母は少しでもよいことがあれば、素直に喜び感心するた（ち）だったのである。学生の試験の採点なども、私よりもはるかに甘かった、……甘かったのではなく、長所をみとめるところが大きかったのである。

それでも、私が自分に許せるのは、僅かにそれだけで、ほかのことでは、——人間として到底母に及ばないし、その上、母のために何かをすることもほとんどなくて、却っておとなになってからまで、結局最後まで、してもらうことばかり多かった。それなのに、病床にあったときも慰めることも足りなかったと思う。——

今になって何ができるわけでもない、母のことを書いたところで、「うん、そうそう、その通りよ」と確認してもらうすべもない。

しかし、及び難いのは承知の上で、母のこと、母の仕事、そして人となりの由つて来るところを幾らかなり叙べさせて頂くことにしたい。なおその上に、母の背後にある母……そ

それは私からいう祖母のことでもあるようであるが、神のみ手に成るもの、そのみ手のはたらくところに存在するものとしての母性Ⅱ「母なるもの」「永遠に超えんとするもの」に回帰するところをおぼろげながらも泛<sup>ふ</sup>び上らせることができたから、(つまり、私は母の背後におぼろげながら大きな普遍的な、個人としての母そのひとをも抱擁している「母なるもの」をいま覚えていたので、……)と至らないことをもかえりみず、願っている。

## I、系譜……その一

「わたくしの生涯を貫き支えているのは、聖書とフレールだ」と折にふれて言い言いついていた。

教育者として、キリスト者として、母親として、女性として、人間として、——動かしようもなく、確固たる姿勢で歩きつづけ、働きつづけた、福永津義<sup>つぎ</sup>という人間。声高に、また大きな身振りで誇示したりは全くしな

いけれども、常に強烈な自覚を以て生き抜いた人間。人を教えても、その教えを集約するのに「愛児の自覚に立て」の一語を以てした、「神に愛され、親(人)に愛されている自己に目覚め、愛されている子どももの自覚を以て自分を生かし、自分のなすべきわざにいそしむ」ことを、人間の本分として我々とともに求めつづけた、その精神のあり様は、自ら言う通り、まさしく「聖書とフレール」に拠っている。

一八九〇(明治二三)年八月六日(戸籍面はいつのまにか五日になっていたという)、熊本県葦北郡津奈木の地に、徳永規矩<sup>のりかた</sup>・うた(のちの通称信子<sup>のぶこ</sup>)の二女、五人姉弟の次姉として生れ、小学校二年から、長崎・活水女学校(現活水学院)に学んだ。

「聖書とフレール」は、この出生と出身校によって、それ以外のあり様<sup>よう</sup>のあるべき余地のない形で、彼女の人格を形成したと言える。

英語を学ぶつもりで入学した横浜英学校でジョン・バラ師に導かれ、当初は反撥しながらついに熱心なキリ

スト者になった規矩、明治初期、日本のプロテスタント・キリスト者の活動の草創期に、教育(学校)事業に、あるいは政界にも、大きな野望を抱き、そして当時不治の業病と恐れられた肺結核を病んで挫折、その病床にあつて著した「逆境の恩寵」の一書を以て、キリスト教界とは、却つて営むはずであつた学校事業にもまして大きな感化をもたらしたといわれる。その徳永規矩の女として、「聖書」は、真実「血肉の養い」と分ち難い「精神の糧」そのものであつた。

「キリスト者(の家)」の子であること、「肺病やみ」の娘であること、それはいずれも、いやでも強い自意識を強いるものであつたに違いない。どちらも、——後者は特に、忌み嫌われ恐れられる事態であつたし、前者にしても、奇異の眼でみられるのはまだしも、迫害されることもなしとはしない時代であつた。しかし、当の一家は、現実に「恩寵」のうちに生活していた。一家は、実際に聖書を呼吸し、聖書を食<sup>は</sup>んで、生活していた観がある。

『人は自らその父母にもせよ師表にもせよ或は他の何れのものにもせよ、これを理想化して尊ぶことも出来ませう。また人々の追憶の中に生きている人は先づ最初に美化され、次で益々現実に遠ざかり、終に偶像化されることも少くないでございませう。』

しかし能力として心にせまり、心をうるほし、かつ私共の生涯を衷にあつて助くるものは単なる理想化された影のような性質のものではないと存ぜられます。』(かなづかい原文のまま)(傍点筆者)

と、津義自身(これは、私の代筆ではない)一九三一年の著「母の面影」のはしがきに記している、その

『子供達の目に映じた父母は申すまでもなく世に所謂偉人でもなく女傑でもございません。ただなつかしき人並の父母であつたのでございます。』(文字づかい原文のまま)

とものべられる、徳永規矩の一家同族にあつて、精神の養いと身体の養いは、今日の精神身体医学が認識している以上に、強烈に現実的な具体性をもつものであつた。

聖書は、奇跡的に病床の規矩を生かしつづけ、その子女らを養った、……病い篤き規矩には、実際に聖書——神のことば——のほか一匙さじの食も通らなかつた日々があり、医師の常識からは危篤を通り越して最早臨終と診断される瀬戸際を、一度ならず二度ならず、生き抜いている。

津義は、ごく稀にしか（生涯に私が覚えているかぎり明らかではただ一度だけ、関係したことにふれたのは、三度ばかり）口にしなかつたが、短い間ながら一家窮迫のあまり、他家に預けられさらに学校の寄宿舎に入れられた期間があつて、それは悲痛にさびしい限りの思い出であつたと思われる。あれほど強く「愛されている自覚」をくり返し自他に求めた底に、「棄てられた」といってはあまりに不当すぎるいいあらわしになるが、あたかもそれに等しいほどの悲しみがあつて、しかも、それを愛されている実感に彫り込むほどの激しい精神のいとなみがあり、その精神のいとなみのエネルギーは、まさしく父母の信仰と父母の人となりから受け継いだに違ひ

ないのである。

活水への入学が一八九七（明治三〇）年、小学二年七歳の時で、上の姉、下の妹たちもともに同じ時に寄宿舎に入っているが、この寄宿舎入りは、前記の事情とは、少くとも、当事者の心情としては全く別のものであつたようである。寄宿舎に入るには幼なすぎる年齢ではあるが、また、一家の経済事情がどれほども恢復してゐたわけではないこともそのように思われるが、活水の生活は他家に預けられ（その延長として寄宿舎に入れられ）たのではなく、学校に入学し寄宿生になつた、という、つまり帰るべき我家にたしかにながつてゐる安堵感のある生活であつた。また、活水という学校こそ、徳永姉妹にとっては、第二の我家ともいふべき拠りどころであつた。

活水学院は、一九七九年十二月一日、創立百周年記念式をあげ、百年史を世に出している。同学院の歴史は、勿論改めてこの小文のとりあげるところではない。ただ、創立者ミス・エリザベス・ラッセルの信仰と人とな

りがまた、徳永姉妹にとっては、血肉の父母の信仰と人となりと間断するところのない、厳しさを失わぬ中に限りなく慈愛深い、優しくもまた頼もしくなつかしいものであったことは、抜き難い事実である。

「あなたは武士のむすめ。しっかりなさい」と折にふれて励まされたこと、宣教師どうしの会合の席でも

「このわたしのむすめたちは日本のむすめ、武士のむすめです」と紹介されたという、肖像にのこる面影にも、慈味あふれる中にどこか威風堂々ともいえる風格がしのばれるラッセル女史は、一面、ユーモラスな、素朴で温かい、その一身を捧げて伝道と教育に尽された日本の風土に、また歴史と人間に、心からの親愛を抱きつづけられた、まことに稀有な人間性の持主であられた。「ラッセル先生」を語るとき、如何にもなつかしように、どこか得意そうにさえみえる津義の口ぶりを、筆者はよく覚えてゐる。

ともあれ、キリスト者であること、聖書に養われたことは、津義の、血脈・骨格をつくり成した基本条件とし

て全く疑を容れないところであると同時に、彼女の人格を生き生きとしたものにしてゐるキリスト教、そして聖書は、かなり独特な、ユニークな要素を帯びていることも考えられる。

ミス・ラッセルがそれを重んじて育てられたように、「武士のむすめ」の語に象徴される性情、あるいは、「明治の人間の気骨」と今日でもいわれる精神主義的な、胸を張り背すじをしゃんと立ててゐる姿勢は、生涯を通しての津義の特徴である。

それもまた、まぎれようのない、父母譲りの特徴なのであった。

明治という、生を享けた時代の特徴も当然あるには違いない。しかし、同じ明治の人間の中でも、やはり相当に独特であると言へるのではないかと思う、……母方の系譜をたどると、中西純一（津義の母うたの父）があり、肥後藩主細川家に対等の客分と遇された八代城主松井家のまた客分たる中西家の当主として、郷党間に気鋭の志士とうたわれていたというが、維新もない時期に階級

打破を唱え、ために刺客につけ狙われたことも一再ではなかったほど、進取英邁の気象であった。その識見は、長女うたを小学時代が終ると肥後八代から京都に、……同志社女学部に入學させたことでも示されている。当時では極めつきの進歩派、革新派だったわけである。一方、津義の父規矩は、蘇峯、蘆花兄弟の從兄に当り、兄弟の父、規矩には伯父である徳富一敬の膝下に人と成った、多分に国士的気概をその資質に具えた人物であったと推察できるようである。横井小楠、竹崎茶堂、といった人々も縁に繋る間がらであり、元田永孚・竹崎茶堂の門に學んだ年少時代には、むしろ、国粹的な氣風を養うこと大であったのであろう。しかし、病を得た規矩は、ただ一つ人間性の核芯を貫く支柱を、キリスト教、というよりも、聖書が啓示する主イエスに見出したのである。

明治の氣風は、必ずしも単純ではない。

蘇峯と蘆花の間に共通するものと相反し相克するもの、……かなり世に知られているこの兄弟のあり様<sup>よう</sup>だけ

を考えても、明治という時代、熊本、そして日本という風土の生み出した人間のある典型を見る思いがするが、規矩は、この二人と資質的に極めて近いものをもちながら、全く異質の人間性を築き上げている。どちらかといえば蘆花に親近するが、規矩の人間性は、蘆花よりは硬質というか剛毅であり、キリスト者として、鋭い省察に徹していた、と言えるように思う。

津義は、父母の双方の資性をうけて、一本気で一途な追求者・求道者であった。ものごとの核心に一気に迫り、枝葉についてはそれほど意を用いない（意に介さない）ところがあった。

彼女の信仰は、「神は愛である」というその一点に、迷うことなく動揺することなく、びしっと焦点を合せている。ヨハネによる福音書第三章一六節、ヨハネの第一の手紙第三章一六節、たまたま同じヨハネ三の一六という聖書の二つの箇所を、常に大切にそしてよるこびを以て心に抱きつづけていたと思われる。（つづく）

（西南女学院）



## 日本における最初の私立幼稚園とその背景 (2)

——近藤はま(浜)と近藤幼稚園 (その二)——

小林 恵子

日本で最初の私立幼稚園は明治十二年、芝で近藤はまが創立した近藤幼稚園であるという石井研堂の説に対し、これは間違いであろうということを前回で述べた。

それでは近藤幼稚園は実際にあったのだろうか。今回は近藤が東京女子師範学校を辞職した明治十四年以降の足跡をたどりながら近藤に係のある幼稚園および保姆養成所について詳しく考察してみたい。

東京都公文書館に明治十六年六月三〇日付で五人連名の共立幼稚園開業願が残っている。<sup>註(1)</sup>この五人とは松平忠

恕、二階堂行正、東儀季芳、大村長衛と近藤で近藤は副幹事として名を連ねている。場所は牛込区市谷薬王寺前町二五の長巖寺<sup>ちやういん</sup>で三百年余り続いている寺である。この寺は昔から教育に力を入れていたようで現在の住職、本多正澈<sup>せいとく</sup>氏の話によると「お早よう会」と称し朝早く子ども達を集め話をしたり歌をうたったりしていたという。明治十六年は祖父(清安)のところで祖父は雅楽人と交わり横笛の奏者だったと云われる。住職で雅楽のできた人はいかなりいたようで保育唱歌を作曲した伶人東儀季芳

(五人連名の一人)とも交わりがあつたのではないかと考

られる。

えられる。明治期は神社と異なり仏寺は経済的に苦しく虐げられた時代で教育や社会事業に場所を提供した寺は少なくなかつたようである。五人連名の一人に浄土真宗の専福寺住職、二階堂行正が名を列ねており同じ宗派の長厳寺が使用されたのもこうした横のつながりがあつたからであろう。寺が早くから幼稚園とかかわりをもつた

三つの幼稚園の廃止の年は明らかではない。東京都発行の「東京の幼稚園」の書によると牛込の共立幼稚園はその後場所もあちこち移転し、設立者も變つて三十九年ごろまでのことが記されている。しかし、近藤がいつごろまで関係をもっていたのか明らかではない。

ことが理解される。七月二十六日開園された<sup>註(2)</sup>とあるが資

以上のように公的な書類でみると近藤が私立幼稚園に關係するのは明治十六年に設立した三園である。しか

料はこの寺に残っていない。特筆されるべきことは、そ

し、「日本幼稚園史」には、それ以前に幼稚園を始めた

の後までもなく四谷区麴町と赤坂氷川町の二ヶ所に分園が

らしいことが次のように記されている。「近藤はま女史が明治十四年芝公園で私立幼稚園を始め、後共立幼稚園と称したのが今日まで継続している。ここは外山正一氏

育科目は東京女子師範とほぼ同じでフレーベルの二十恩

その他教育関係者が後援していて当時から本格的のものであつた<sup>註(3)</sup>という。」外山正一は当時、東京帝国大学の教授

物を用い近藤が三つの幼稚園の保育を指導監督したもの

のち総長となり文部大臣となつた人である。もし、この

と思われる。開業願の第九条に「官立幼稚園保姆練習科卒業生ヲ以テ教師トス」とある。保姆練習科が明治十三年七月に廃止されていることを考えると、そのあととはど

の説が正しければ、この園は明治十三年四月に創立された桜井女学校付属幼稚園に次ぎ東京では二番目に古い私立

のように保姆を補充したのか、おそらく最初の保姆は近藤が指導した十一名の卒業生たちの誰かであつたと考え

幼稚園となるが、これを裏づける資料がみいだせない。

しかし、女子師範付属幼稚園を辞職した明治十四年以降、近藤が芝で幼稚園を開いたという説は考えられることで、これを近藤幼稚園と云い、それが後に芝・麻布共立幼稚園へと発展したのではないかと推測される。

しかし公的な書類によると、芝麻布共立幼稚園の設立は明治十七年十月で、九月三〇日に設置願が提出されている。出願者は富田鉄之助、子安峻、山東直砥の三人でいずれも大物であった。富田は日本銀行の総裁、東京府知事となった人で一橋大学の前身、商法講習所創設者の一人である。子安は読売新聞の創設者の一人で初代社長であり、山東は神奈川県参事をつとめ洋漢学の私塾など教育事業にたずさわっている。これらの三者は幕末維新後、蘭・英学に通じいち早く海外文化に触れた人々で開明推進の事業の一つに幼稚園の誕生を望んだものと考えられる。明治七年十二月十六日の読売新聞に子安は育児論を発表し「親友近藤真琴先生の家へ行き種々の話のうちふと談が塊地利の首府維也納の博覧会のことに関し近藤先生が彼地にて見たり聞いたりしたことを摘んで録

しておいたとてその草稿を示されしゆえ開いて見ると小児撫育という……」などと記している。<sup>註(4)</sup> おそらくフレールの幼稚園についてもいち早く目にとめていたに違いない。また「富田鉄之助伝」を読むと彼は米國留学中、聖書を学び宗教にふれるが、当時の日本が西洋の真似ごとにとりその根底にあるものを理解していないことを指摘している。彼の日記（明治十八・七・三）に「鹿鳴館ニバザーを開キ金員ヲ募集シ私立ノ病院ヲ初メ貧者ヲ賑サントスルノ仁慈ヲ主張スル一二ノ人アリ之レ海外ノ輸入策ナレトモ海外ノ仁慈ハ宗教ノ本心ヨリ起ル所ノモノナルニ基本ヲ極メス単ニ其皮相ノ輸入ナレバ其弊已ニ賄路ノ一具トナリタルアリ」と記し外形の模倣を戒しめている。<sup>註(5)</sup>

以上のことは近藤の主題から離れたようであるが、草創期に私立幼稚園を設立しようとした人々がいかに真剣に日本の将来を考えて幼稚園の設置を望んでいたかが理解されるであろう。そしてこの幼稚園がいかに本格的なものであったかは「東京名所図会」の書に次のように記

されている。「其監督者は文学博士外山正一、バチエラ

・オフアート神田乃武、ドクトル、オフ、フヒロソフイ

ー元良勇次郎氏なり別に保姆三名、保姆補三名を置き、

懇篤<sup>こんく</sup>に保育し、幼稚なる善男善女をして、うませざる

は、其教育の好しきを証するに足りなん、尚ほ別室に附

添女中控所なるものを設け、其附添人をして、随意裁縫

編物等を為さしむるなど、用意到らざるところなし」と。<sup>註⑥</sup>

近藤はこの幼稚園長兼保姆として重要な人物であつ

た。女子師範での経験を生かし、園長としてフレーベル

式保育を実践し指導した。園の開園は十月十日、所在地

は芝公園六三号岳蓮社<sup>がくれんしゃ</sup>内で当時は増上寺のなかにあり三

千〇三九坪の広い敷地を有した。おそらくその一部が使

用されたのであろう。前に述べたように寺が教育事業に

場所を提供していたことがここでも理解される。保育料

は一ヶ月一円で女子師範の附属が二五銭だった事を考え

るとかなり高く入園した園児も中流以上の家庭に限られ

たものと考えられる。こうした私立幼稚園の経営の問題

はいろいろと大変であつたらしく先に述べた富田鉄之助

の明治十八年の日記に「昨日午後幼稚園ニ集会ス議決ハ

保姆ノ給料増加ノ事年末賞与金ノコト等ナリ」とある。<sup>註⑦</sup>

今日と同様、私立幼稚園の経営の問題は苦勞があつたこ

とと察せられる。この幼稚園を東京都立教育研究所発行

(昭和四八)の「東京教育史資料大系(第六卷)」で公立

としてるのは誤りである。この幼稚園がいかに盛況で

あつたかは幼児定員百名では希望者を収容できなかった

ようで百五十名と改正し「幼童増員御届」を二十一年十

月、近藤が東京府知事あてに提出していることである。

東京女子師範学校附属幼稚園に次いで東京では規模も大

きく評判の高い幼稚園であつたと云えよう。

さて、明治二十一年十月、この芝麻布共立幼稚園内に

東京府教育付属幼稚園保姆講習所(私立)が設立されてい

る。私立では十七年に設立された桜井女学校附属幼稚保

育科に次いで二番目にできたもので保姆養成機関として

規則その他の形式がよくとのつてゐる。東京府教育会

は、明治十六年、「府下教育ノ改良進歩ヲ図ル」ことを

目的として有志者によつて設立された。そして本会的事

業として保姆講習所を新設することが決議され木寺安敦を設立者として設置願が提出されたのである。

この東京府教育会付属幼稚園保姆講習所が理在の竹早教育養成所である。「竹早だより」の創立75周年記念誌に「明治二十一年十月五日・芝公園六号地（現・共立薬科大学所在地）における芝麻布共立幼稚園内で東京府教育会付属保姆講習所として呱呱の声をあげて」<sup>註(8)</sup>とあるが（ ）は間違いで誕生地は芝公園の岳蓮社内である。

この幼稚園が道をへだてて現在の共立薬科大学所在地に移転するのは同二十七年一月で山東直砥から東京府知事に届けがだされている。したがって保姆講習所も幼稚園とともに岳蓮社から現在の共立薬科大学所在地に移転したのである。

ところでこの保姆講習所の設置願に近藤浜が教員として次のような履歴書を提出している。<sup>註(9)</sup>

#### 履歴書

明治八年十月 東京女子師範学校舎長拝命

同 九年 同校附属幼稚園保姆拝命

同十四年四月 辞職

同十七年七月ヨリ芝麻布共立幼稚園々長仕居候也

明治二十一年九月二五日

芝公園地六十三号

教員 近藤 浜 印

天保十一年二月生

名前の上に教員とあり、東京府教育会付属幼稚園保姆講習所の創立時の教師は幼稚園の園長であった近藤が教員を兼ねていたことが明らかである。しかし竹早教員養成所の沿革を記した「創立75周年記念誌（竹早だより）」や「教員養成九十年」<sup>註(10)</sup>のどこにも近藤の名前がみいだせないのは何故であろうか。そして田中ふさが「東京では最初の幼稚園長であり」<sup>註(11)</sup>とあるのはあきらかな間違いで、この幼稚園においても最初の園長は近藤で近藤は、この養成所の生みの苦勞をした中心人物であった。設立者として開業届をだした木寺安敦は東京府教育会の議員

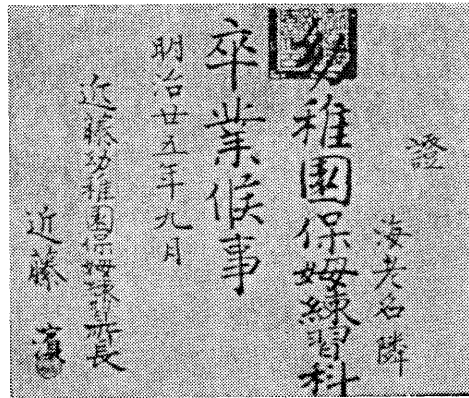
の一人で、この会の事業の一つである幼稚園保姆講習所の初代主幹として活躍した。しかし、日常保育の実際に關しては最も経験のある近藤が中心となって生徒の指導に當つたものとみて間違いない。創設當時、この養成所は幼稚園の終つたあと「午後二時ヨリ四時迄トス」<sup>(註12)</sup>という短い時間で、ここには幼稚園で実際に保育に當つてゐる保姆がかなり入所したようである。「東京都教育会六十年史」に掲載されている講習所の規則（第四条）によると、講習員になる資格の一つに「幼稚園保姆若しくは小学校教員及授業生の職にある者」<sup>(註13)</sup>とあり、東京府にだした届けと違つて現場の保姆または補助者の教育を兼ねていたことが明らかである。明治二十二年一月にこの講習所の教員となつた田中ふさは次のように記している。

「漸々園の数も多くなつて來ました明治二十一、二年頃には保姆の需要が激増したのであります。然るに丁度その頃にはお茶の水の保姆科が一時廃止されて居りましたので保姆の供給は十分でなかつたのであります。そこで時勢の要求に驅られて生れ出たのが東京府教育会附属保

姆講習所（後に保姆伝習所と改称）であります。而して同所の創立當時には保姆の需要がはげしく、急成を要しましたので最初の内の講習期間は半ヶ年であります、つまり六ヶ月の急稽古で兎も角も社会の静要に應ずべき保姆を作り上げたのであります」<sup>(註14)</sup>

以上のことから理解できるように、現場の保姆のため恩物の扱いや手技、遊嬉といった実技の指導を短期間で教えたので、當時の学科課程は開誘法（フレーベルの二十恩物の諸法）遊嬉法、唱歌、実地授業がすべてであつた。したがつてフレーベルの幼稚園設立の根本である「人間の教育」の書のエデュケーションや「母の歌と愛撫の歌」の教育的意図といった原理的な授業がくみこまれておらず外形の実技修得にのみ忙しかつたことが理解される。

さて、近藤と近藤幼稚園のことであるが明治二十二年、近藤は東京府知事あて「幼稚園保姆練習所設置願」を提出している。これは一体、東京府教育会付属のものとどういふ關係にあつたのだろうか。設置場所は同じ共立幼稚園内であり、このあたりは何か特別な事情があつ



卒業證書

たものと察せられる。「東京の幼稚園」の本に近藤が東京府学務課にあてた自筆の設置願の写真が掲載されている。二度も書簡を送っているところを見ると、よくよくのことがあったに違いない。<sup>(註四)</sup>なお、参考までに田中房の履歴をみると十八年十月から二十一年十二月まで近藤とともに芝麻布共立幼稚園保姆をつとめ、二十二年一月から築地の私立幼稚園長となり、同時に東京府教育会付属

保姆講習所教員を嘱託とある。また、二十三年三月芝麻布共立幼稚園長となって近藤浜と入れ代ったものと思われる<sup>(註四)</sup>とあるが、このあたりの事情は明らかでない。とにかく近藤は独自に幼稚園保姆練習科を始めようとして東京府教育会付属のものとはほぼ同じ規則や内容で設置願を提出していることがあきらかである。<sup>(註四)</sup>

近藤が始めた幼稚園保姆講習所がいつまで続いたのかあきらかではない。最初は同じ共立幼稚園で始められ、のち芝巴町に移っている。興味ぶかいことは、この保姆練習所の名称である。当時の卒業生で若松幼稚園を創立した海老名<sup>えびなり</sup>隣<sup>りん</sup>の卒業証書を見ると、「近藤幼稚園保姆講習所」という名前がみられる。「日本幼児保育史」第一巻に「海老名リン子女史の生い立ち」の記が次のように掲載されている。「明治二十三年四月―中略―幼児教育に対する経験と大きな抱負に燃えて、日本最初の幼稚園創始者、保姆練習所長、近藤浜女史について十ヶ月間保育の実際と理論を勉強云々」<sup>(註四)</sup>これをみても近藤の名前はかなり有名だったように思われる。また明治期の私立幼

稚園を保姆の履歴でみていくと、頌栄幼稚園保姆、奈良英は近藤浜の保姆練習所と東京府教育会付属伝習所卒とあり、<sup>(註10)</sup>また麻布区教育会付属幼稚園保姆、吉住幾久の履歴に二十五年二月付近藤幼稚園長近藤浜の「幼稚園保姆練習全科修了」の証書の写しがそえられ（芝巴町幼稚園保姆練習全科修業）とある。<sup>(註11)</sup>近藤は巴町に移ったことから別名で芝巴町とも云ったのであろう。様々な呼び方をしたらしい。近藤の名前は、前回に記したように雑誌「婦人と子ども」の第二卷（明治三十四）第四号の会員名簿に記載っており、この頃まで続いていたのではなからうか。「竹早だより」の創立75周年記念誌に後援会長の木下一雄が芝麻布共立幼稚園を「東京ではじめてできた幼稚園」とし竹早教員養成所の「初代主幹は田中ふさ」<sup>(註12)</sup>と記しておられるのは間違いで、初代主幹は木寺安敦で最初の教員は近藤浜である。木下氏の話によると明治三十六年から四十一年、東京府立第一中学校の生徒の頃、同級生の一人に田中ふさの息子がいてよく幼稚園に遊びに行くと云われる。この幼稚園は「芝区誌」に昭和十年現

在で記録があり、<sup>(註13)</sup>「東京府史」（昭和十二年）に写真が掲載されている。<sup>(註14)</sup>その頃まで続いたのであろう。

以上のことから考えられるのは近藤幼稚園とは芝麻布共立幼稚園のことであり、十七年の創立より以前に近藤が始めたかも知れないという推察もなされ得るが資料はみいだせない。しかし、明治十二年というのは間違いですくなくとも東京女子師範附属幼稚園を辞職した十四年以降であると考ええる。今のところ日本で最初の私立幼稚園を芝の近藤幼稚園であるとする石井研堂の説には何一つ根拠がみつからず、この説は誤りであると考ええる。

それにしても、これだけの仕事をした近藤が保育の功労者としての名前もとどめず、誰からも忘れられて晩年を終えたことは余りにもわびしすぎるように思われる。少なくとも我が国で最初の幼稚園保姆で、保育唱歌を作り、竹早教員養成所の最初の教員であった功績を人々に知って貰いたいと切に願うものである。（つづく）

（国立音楽大学）



註(1)明治十六年七月—九月各種学校書類。

- (2)「東京の幼稚園」東京都 昭和四一 七五頁
- (3)倉橋惣三・新庄よしこ共著「日本幼稚園史」臨川書店  
昭和・五 四二九頁
- (4)「読売新聞百年史」読売新聞百年史編集委員会発行 昭和  
五一参照
- (5)吉野俊彦著「忘れられた元日銀総裁—富田鐵之助伝—」東  
洋経済新報社 昭和四九 三六七頁
- (6)「東京名所図会」(原本 新選東京名所図会)陸書房 昭  
和・四四 四一頁
- (7)吉野俊彦著「忘れられた元日銀総裁」(前掲書)明治十八  
年十一月二十九日の日記 四一〇頁
- (8)「竹早だより」創立75周年記念誌(第五号)竹早教育養成  
所 昭和三八・十二頁
- (9)明治二十一年 各種学校八(公文書館在)
- (10)「教員養成九十年」竹早学園 昭和五四年
- (11)「竹早だより」(前掲書)三頁
- (12)東京府教育会付属幼稚園保姆講習所の設置願 明治二十一  
年各種学校八
- (13)「東京都教育会六十年史」東京都教育会発行 昭和十九年

二二頁

- (14)田中房子「私立幼稚園の発達」「幼児の教育」第十七卷第  
十号

- (15)「東京の幼稚園」(前掲書)一四四頁

- (16)同右 九一頁

- (17)明治二十二年 各種学校一

- (18)「日本幼児保育史」(第一卷)日本保育学会 フレーベル  
館 一八二頁

- (19)「東京の幼稚園」(前掲書)一五八頁

- (20)同右 一七六頁

- (21)「竹早だより」(前掲書)八頁

- (22)「芝区誌」芝区役所 昭和三五 第七章 教育 七二三頁

- (23)「東京府史 行政篇 第五卷」東京府発行 昭和十二年

三八四頁

☆訪問およびご指導頂いた方(敬称略)

- 長巖寺 専福寺 岳蓮社 増上寺 竹早教員養成所 東京都  
公文書館 港区立みなと図書館 一ツ橋大学図書館 木下一  
雄 細谷新治 吉野俊彦

☆写真掲載 「幼児保育百年の歩み」日本保育学会編 ぎょう

せい 昭和五六 七五頁

## 続・保育の中の小さなこと大切なこと⑫

守 永 英 子

十月も半ば、二週間ほど後に運動会を控えて、年長組の子どもたちのグループが、レコードに合わせて、庭で、ゆうぎを始めた。三才児クラスの子どもたちも、何人かは、それに気づいて眺めていたが、そのうち男児Rが、「ほくちちも体操するの？」と問いかけてきた。午後に、ハトポッポ体操のレコードを、庭に流す予定であったので、「おべんとうのあとで、いっしょにしましょうね」と言うと、Rは、「ふうん」と言っただけで、自分の遊びを続けた。

年長組の、運動会の雰囲気作りに合わせて、部屋でもレコードをかけ、動いてみせると、数人の女児は、喜んで、一緒に踊り始めた。しかし、Rが、泣き声で「レコードを止めてよ」と、いやがったので、「もっと、踊ろうよ」と言う女児たちに、「又、今度しましょうね」と言って、直にやめることになったが、そのことを、私は、それほど深く気に留めていなかった。

ところが、おべんとうが済むと、Rが、急に、泣

いてぐずり始めた。「もう帰る。ママのところに行く。」とうとう玄関に椅子を持ち出し、「ここでママを待つて。お部屋には行かない」と、激しく泣き出した。なだめながら、やっと聞き出したのは、「体操をするのがいやだ」ということ。思いがけない激しい拒絶に、いささか驚いたが、「しなくてもいいのよ」となだめて、部屋に連れ戻り、水槽の金魚や田にしを見ながら、気を紛らせた。初めての体操でもあり、「今日は、見ていただけにしようかしら？」と思っっている私に、女兒たちは、「又、踊ろうよ」と誘いかける。結局、しり込みしているAとRを、「ここで見ていてね」と、部屋の入口に残して、他の子どもたちと、体操に参加し、その間、Rは、くずっていた。

こうして、その翌日から、Rの日課が始まった。「ほく、体操をしないよ。運動会もしないよ」と、毎朝、念を押すのである。「いいわ」と答えながら、私の心は揺れた。できれば参加してほしい、でも、

Rにとって、とてもいやなことならば、無理にさせることはやめようか……。迷いながら、一週間、私は、Rを刺激することを控え、働きかける方向を変えることを考えた。運動会の帽子の用意が出来たのをきっかけに、「みんな、＼＼＼、＼＼＼」をやるから、応援してくれる？」と誘いかけ、やっと、ささやかな声援を得られたのが、Rの、運動会への参加の第一歩であった。相変わらず、「体操をしないよ」を繰り返していたが、部屋でかけるレコードも、「これは体操じゃないの。おゆうぎよ」、「体操しないよ」、「でも、Rちゃんのハトポッポ、とても上手よ」、などというやりとりのうちに、次第に、一緒に動き始め、うれしそうな表情さえ、浮かぶようになった。

「体操はしないよ。運動会もしないよ」という、毎朝の日課は続いていたが、運動会も無事に参加し、「これが運動会だったの」と言っ、又、私を驚かせた。

“体操”“運動会”という言葉に、彼は、一体、どんなイメージを持っていたのであろうか。拒絶しなければならぬようなイメージが、何時、どこで、どうして作られたのであろうか。

思い当ることもないまま、母親に尋ねてみた。入園前に、音楽教室に行き、毎回、泣いていやがり、三か月でやめたこと、最近も、水泳教室に通い始めたが、いやがっていること、皆で一斉にさせられることが、とても、いやらしく、入園前から、幼稚園の集団生活も続くかしらと、危ぶんでいた、ということであった。

運動会が済んでも、毎朝の、「体操しないよ」という日課は、しばらく続いた。いつまで続くのだろうか、と思いながら、その言い方に、少し“ゆとり”をみせてきた彼の気持の変化を感じて、私も、対応の仕方を変えて、正面から、受けとめてみることにした。「Rちゃんは、自分ができないような、

むずかしいことをするんじゃないかと思って、心配なの?」「うん」「幼稚園では、Rちゃんが一生懸命やってもできないような、むずかしいことは、しないわ」。この会話のあと、二日間の休みを境に、Rの日課は、ピタリとやんだ。

いろいろな言葉の持つイメージは、個々の子どもによって異なり、その違いは、子どもが育つ上で、重要な意味を帯びてくるように思われる。“おとな”“先生”“友だち”“幼稚園”など、様々な言葉が、どのようなイメージに作られていくか、その責任の一端を担っていることを思うとき、小さな事も、おろそかにはできないのである。

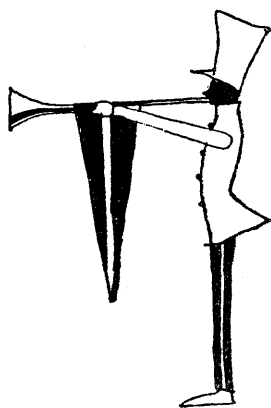
Ⅱ了Ⅱ

(お茶の水女子大学附属幼稚園)



# イギリスの幼児教育

中村 英勝



私は一九八〇年三月末から四月はじめにかけて行われ

た日本幼稚園協会およびみどり会主催の第十回幼児教育  
海外事情視察旅行に参加して、イギリスのロンドンおよ  
びスペインのマドリードにおける幼児教育を視察した。

これより前、一九七六年三月末から四月はじめに第二回  
視察旅行が行われ、英（ロンドン）仏（パリ）独（ハン  
ブルク）の幼児教育視察についての報告書がプリントさ  
れている。そこで、私が実際に見聞したことを中心と  
し、第二回および第十回の視察報告を参考にして、イギ

リスの幼児教育について述べてみたい。

最初に、日本とは異なるイギリスの幼児教育および初等  
教育の制度について簡単に述べておくのが適当と思われ  
る。イギリスの教育制度は日本のように画一化されてい  
ないが、基本的にはだいたい次の通りである。二歳半か  
ら五歳までの幼児をあずかるのが保育学校 (nursery  
school) で、五歳から義務教育が始まり、七歳までの幼  
児を教育するのが幼児学校 (infant(s) school) である。  
七歳から十一歳までの児童が入るのが初級学校 (junior

school)で、十二歳から十五歳までの中等教育を含めて、義務教育となっている。三歳から十一歳までの幼児・児童を教育する初等学校 (primary school) というのも数多く存在している。

次に、イギリスの幼児教育視察でとくに要望されたことは、通訳を含めて、なるべく五人までの小人数で来てほしいということであった。第二回視察旅行の際には、総員三十九名が三・四名ずつの十グループに分かれて視察し、第十回の際には、総員十五名が七・四・四名の三グループに分かれた。大勢どやどや来られて、子どもの生活をみだされるのを嫌うからである。イギリスの幼児教育は日本に比べるとはるかに静かで神経の行き届いた雰囲気のうちで行われているといえよう。

一九八〇年三月二十六日朝、私は四名のBグループに参加し、通訳兼ガイドの日本婦人に案内されて、セント・アーミンス・ホテルを出、セント・ジェームズ・パーク駅から地下鉄ディストリクト線に乗って、ロンドンの東、マイル・エンド駅で下車、徒歩数分でタワー・ハ

ムレッツ区のハートフォード街に入った。昔からロンドンのイースト・エンド (東部地区) は貧民の住む地域と聞いていたが、このあたりは煉瓦造り四階建の公営賃貸住宅が整然と建ち並ぶ団地のようなところで、恐らく第二次大戦の空襲で破壊された後に整備された地区ではないかと思われる。

この地区のハリー・ロバーツ・ナースリー・スクールは、一九七一年に開設された、幼稚園というよりも保育園のような施設である。この地域で外科医院を経営し、多年にわたって多くの貧しい患者たちを無料で診療し、保健や社会福祉の諸問題で新聞その他に健筆をふるったハリー・ロバーツ博士の名に因<sup>よ</sup>んで、この保育学校の名前が付けられたという。今日イギリスは「斜陽国」といわれ、「英国病」などという言葉が聞かれるが、このような施設を見ると、十九世紀以来の民間の自発的な善意にもとづく人道主義と社会福祉の伝統の深さを知ることができる。

一日保育の四・五歳児が五〇名、その保育時間は九時

半から三時半、午前保育（九時半～十一時）と午後保育（一時～三時半）の三～五歳児が三〇名ずつであるから、常時八〇名の子どもがいるわけである。これを縦割りに二クラスに分け、四〇名ずつ保育している。音楽とお話の時間だけクラスにわかれ、他の時間は子どもたちはそれぞれ好きなところで遊んでいるようである。

園長のほかに三名の資格ある教諭がいて、各クラスに二名のアシスタント（保育）がつき、欠員の場合に来るリリーフ・アシスタントも一名いる。教育実習生が来ることもある。教諭の資格は、十八歳で高校卒業後、大学で三年間の教育を受け、教職課程をとり、三ヶ月ほど実習に従事し、その間自分でプログラムを作り、幼児を対象として研究し、二十一歳で卒業すると直ちに教諭として勤務、専門職として誇りをもって仕事に当たっているようである。保育は中学校卒業後、保育養成所で教育を受け、資格をとる。園長以下ほとんどすべて女性である。

ハリー・ロバート保育学校の構内に入ると、白人の子どものほか、西インド諸島から来た黒人や、インド人・

パキスタン人・バン格拉デシュ人の子どもが多く、皮膚の色や顔つきはさまざまである。これらのもとイギリス帝国の植民地であった国々の人々は、今日、英連邦市民権をもっているためイギリスに入国し易く、ロンドンその他イギリスの大都会には有色人種の人々が多いということは、かねてから知っていたが、この保育園の人種の展覧会のような状態に、今さらのように深い感銘を得たしだいであった。園長のウェップ先生に、人種から生ずる問題はないかと伺ったところ、父親は仕事の関係で英語をしゃべるが、母親に英語のできない者がいるため、子どもにも英語をほとんど知らない者がいて、言葉を教える必要があるほかは、全く問題はないということであった。皮肉な見方をすれば、今日のイギリスは過去の英帝国のツケを払わされているということであるが、保育園の先生方がどの人種の子どもたちも全く差別することなく、温い気持で平等に保育し、子どもたちも互いに何のわけへだてもなく混じり合って遊んでいる情景は、我々島国に住む単一民族である日本人から見ると、これか

らの国際化社会の状況を先取りしているような光景であった。園長の話では、子どもたちがそれぞれ固有の文化をもち、それを守らせながら、イギリスの文化を体験させるようにしている、ということであった。

この日の午後には、ロンドン北部にあるハイゲート・ナースリー・スクールを視察した。カール・マルクスの墓のあることで有名なハイゲート墓地に近く、一九六〇年夏に来たところで、以前は比較的高級な住宅であったが、現在は貧・富入り混った地域で、この保育園にも黒人の子どもが何人かいた。このような保育園はいずれも公立で、一般市民の納める税金で維持され、貧しい家庭や問題のある家庭の子どもを優先的に入れているということである。中産階級以上の子どもたちのためには、プレイグループ (playgroup) という施設があつて、我々一行のうちCグループがこの日の午前に視察した、ロンドン北部フィンチレー地区のメソディスト・プレイグループはそのような施設であつた。十一年前に教会の牧師夫妻が地域の要望にもとづいて創設し、教会の建物を使用

しているが、宗教に関係なく三・五歳の子どもたち二十五名ほどをあずかっている。母親たちが一年間言語・児童心理などの講習をうけ、さらに上級の講習をうけると、保母の資格を得られるということである。このような施設は全国に普及し、教育庁の公認をうけると、年数百ポンドの助成金が与えられ、専門家の指導もうけられる。牧師夫妻・母親代表二名・主任などから成る運営委員会があり、保育内容は主任に委されている。保育料として一日五〇ペンスずつ集められ、バザーの売上げなども運営・教材費などに当てられている。保育時間は九時十五分―十一時十五分で、木工・ぬたくり絵・砂遊びなど、先生方の見守る中で、子どもたちは興味のおもむくままに活動する。手から覚えることによって頭脳の発達につながるという考え方にもとづいている。

Aグループの人々がこの日の午後に視察したのは、ロンドン南郊クロイドンのインファンツ・スクールで、四才半―七歳の幼児二十五名ほどで一クラスを構成し、午前三時間には読み・書き・算数の授業が行われ、午後は



体操と創造活動に当てられている。九時十五分に登校し、昼食をとり、三時半に下校。外国人の子どもも多く、英語の勉強に力を入れ、母親たちも一緒に勉強できるようにになっている。日本人の男の子も入っていて、父親が朝日新聞社員で、日本の新聞にこの学校が紹介されたこともあるという。大文字のアルファベットを型取ったのがあって、型の中をぬったりして、字を自然に覚える。絵の好きな子は長時間絵かきに熱中し、それぞれの個性に応じて、劣等感をもたず、自信をもって活動するように配慮されている。

私は中国やギリシアの幼児教育も視察したが、これらの国々では子どもに、「教える」ことに力が注がれているように見うけられた。これに対してイギリスやアメリカでは、子どもの自発性・個性・創造力を尊重する保育が行われている。ハイゲートの保育園の先生は、教えることより子どもの社会性を育成することが大切であると言っておられた。イギリスの幼児教育では、国際色豊かなこともあってか、社会的コミュニケーションの手段と

しての言葉をしっかり身に付けさせることに重点がおかれている。また遊具のあとかたづけなど、その場その場の「積み重ねの効果」にもとづく躰に力を入れている。

イギリスの文部省は基本的なガイドラインを示すだけで、各地方の教育庁が学校教育を指導し、地方に応じた特色を出している。そして、それぞれの学校の校長や園長が大きな責任をもち、それぞれの考え方や教育方針にもとづいて、相当の程度まで自由に教育することができると。また親子関係を重視し、父母の愛情がしっかりしていれば、必ず健全な人間に育つという考え方に立っている。従って母親との連絡に力を入れ、親たちは何時までも来て相談できる雰囲気できており、問題のある家庭を地域のソーシャル・ワーカーが訪問して、話し合っている。現在の日本の教育には、受験勉強・暴力教室・核家族における母親の経験不足・父親の威信の低下など、問題が多い。イギリスはさすが先進国だけあって、その社会と文化の古い伝統にもとづく、きめ細かい行届いた教育には、学すべき点が多々あると思う。(お茶の水女子大学)



## ブリュッゲルの「子供の遊戯」 5

——輪回しからお店屋さんごっこまで——

森 洋子

### 22、輪回し（男） Hoepelen（フランドルでは reep）（図1）

既製の玩具が少なかった時代、子どもたちは身の回りの対象物を玩具とするのを常としていた。樽は今日でも使用されているが、古くはとくに物の保存や輸送のために、例えば、ビール、ワイン、バターなどの重宝された容器であった。それが廃品化したとき、子供たちは樽で種々の遊びを考えた。22、23、24番はいずれも樽を遊具

としている。

「輪回し」は樽の箍（かぎ）を使用しているが、材質としては、鉄ないし木（図2）で形も丸いものや一本の棒を輪にしたものなどがある。すでにギリシャやローマ時代には、鉄製の輪が使われていた。しかしブリュッゲルの時代では木製の箍（かぎ）であった。ド・マイヤーによると、半世紀前まで、フランドルの子供たちは集団をなして大通りを輪をころがして走ったという。輪を倒すことなく、一番早く、もっとも狭い小路を通って目的地に到達した者が勝

者となる。コックとテールリンクはこの輪回し競争について、勝者は一番安い硬貨を賞してもらい、それを輪の内側につけて技を自慢した、と説明する。<sup>注2</sup> 十七世紀のオランダのタイル画(図3)には、それを思わせる例がみられ、輪の内側に12個の飾りがついている。そのほか、シリマンの銅版画(図4)のように、金属片をとりつけることもある。とくにその場合は輪が回るとき、カタカタという音を立て、かなりの騒音になったにちがいない

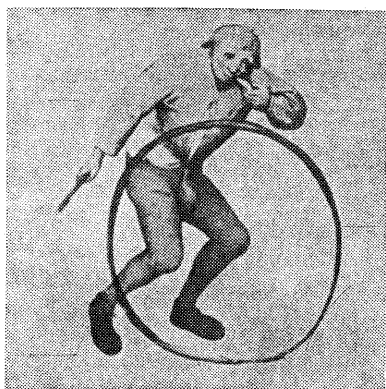


図1 プリューゲル「輪回し」(男)  
(「子供の遊戯」の部分②)

い。それだけでなく、この遊びは輪が思いがけない場所にくらがったりするため、十七世紀、子供が道路で輪回しをするのを禁じた法令があった。ドローストによると、最古と思われる例は一四五六年のドルトレヒトの禁止令。さらに一四八五年に、同市で「ポルツイ・ランツイと叫びながら、道路で輪回しをしてはならない」という法令を出している。「ポルツイ・ランツイ」というのは、輪回し合戦のときの「掛声」だった。<sup>注4</sup>

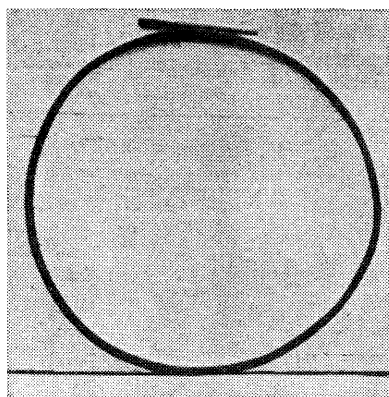


図2 木製の輪と棒  
19世紀 直径92cm



図5 マルテン・ド・ヴォス「輪回し」(部分)  
(1610年頃, ド・ブライン発行)



図3 「輪回し」オランダのタイル画  
17世紀中期

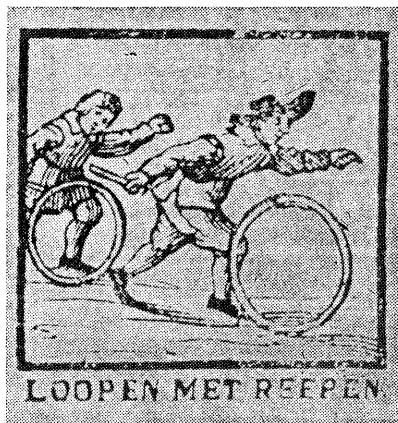


図6 「輪回し」オランダの版画の部分,  
18世紀

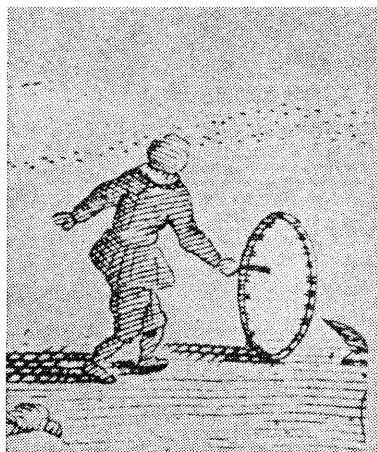


図4 E, シリマン「輪回し」(部分)  
(カッツ『結婚について』1642年より) 銅版画

なお、一八六九年六月二十三日付のある商業新聞にも、この遊びへの抗議を記事にしている。

ところで、輪回しは十七世紀においてもひじょうにポピュラーで、オランダの詩人ヴォンデルはこう謳っている。

「元気な子供の群れにともなわれ、

街中を、

カランカランと音立てて、



図7 「輪回し」 オランダのタイル画  
17世紀後半

輪を回していった……」<sup>注5</sup>

遊び方はきわめて単純で、ブリュッゲルの絵や十七、八世紀の版画(図5、6)、またそれより少し後のオランダのタイル画(図7)にみられるように、子供たちは片手に短い棒をもって、輪をたたきながら、ころがすのである。ガイラー・フォン・カイゼルベルクの『エメイス』(一五一六年)にも、「輪をころがし、その上を棒で打つ子供……」<sup>注6</sup>と叙述されている。



図8 「輪回し」(ルーマー・フィッシャー  
『寓意人形』1614年より) 銅版画

興味深いのは、ルーマー・フィッシャーがその著『寓意人形』（一六一四年）の中で、この輪回し遊びに「静かにしている方がよい」（図8）という格言を与えている点である。さらにテキストには、「何ら有益でない仕事に、汗水たらし疲れるよりは、むしろ静かにしている方がよい」と注釈をつけている。

このほか十七世紀オランダの詩人ヤコブ・カッツも「輪回し遊び」を、いつも同じ人生を繰り返す人間への警鐘として、こう比喩的に謳っている。

「輪回し遊びの子供をみると、

まるである人間の姿を示しているようだ。

一生の間、ひとりで、自分の昔のやり方で、

生きている人間の姿を。

彼は太陽を見、月を見る。

空が、回っているのを見る。

彼は時とともに回る。

しかし彼はもといたところに再びもどる。

彼は全行程において、

多くの人びとと同じように行為する。

彼は新しい年がめぐって来ても、

同じようにし、

何ら変化をかんじない。

彼は顔にしわが沢山寄っても、

まだ昔と同じ遊びをしている。」

### 23、輪回し（女）De Meisjeshepel（図9）

種々のオランダのタイル画をみると、この遊びは主として男の子の楽しみだったようだ。しかしブリュッゲルの絵では、女の子（見方によっては男の子にも見えるが）も輪回しをしている。ただその違いは、女の子の輪の内側には同じ間隔で六個ないしそれ以上の金属片（鉄屑）

がつけられ、輪が回るたびにカタカタという音がした。

しかしそれが22番で述べた、男の子用の輪についた硬貨や鉄屑のそれとどう違うのか確認できないが、しかし作例でみるかぎり、男の子の輪には大抵何もつけられていない場合が多い。後に女の子用の輪には鉄屑の代わり

に、銅の鈴がつけられ、チリンチリンと可愛い音をたてたのである。

## 24、樽栓の穴から叫ぶ Door 't Bomgat roepen

(図10)

男の子も女の子もこの遊びが好きで、樽栓の穴に口をつけて高い声や低い声で叫び空洞の樽の中で反響した声を楽しむ。この遊びは年少の子供に好まれたらしく、プ

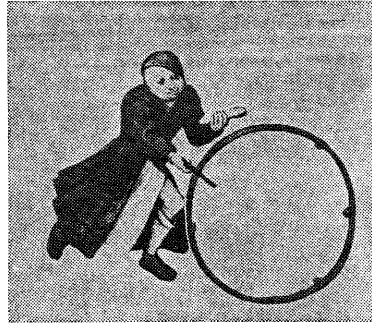


図9 ブリュージェル「輪回し」  
(「子供の遊戯」の部分③)

リュージェルの画面でも小さな女の子が画かれている。

## 25、シーソー」 Schommelen (図11)

二人の男の子が樽の上に馬乗りになり、両手をしっかりと樽の穴にかけ、片足が地面につくまで激しく左右に揺らし、シーソーごっこをしている。あるフランドルの地域ではこれを *Kistje-weegard doen* (小さな荷箱を行ったり来たりさせる) と呼んでいた。



図10 ブリュージェル「樽栓の穴から叫ぶ」  
(「子供の遊戯」の部分④)

26、風船(豚の膀胱)遊び De Varkensblaas (図12)

秋も深まると、農夫たちは豚を山に連れて行き、どんぐりの実を沢山食べさせて肥らせ、やがて十一月か十二月に、屠殺する。豚の膀胱は元来、豆やそら豆を保存する壺代わりの役割りもするのだが、他方、子供たちはそ



図11 ブリューゲル「シーソーごっこ」  
(「子供の遊戯」の部分㉔)



図13 「風船揚げ」  
オランダのタイル画 18世紀



図12 ブリューゲル「風船(豚の膀胱)遊び」(「子供の遊戯」㉕)



れを風船のようにして遊ぶのを楽しみにした。ブリュールゲルの絵でも、女の子が豚の膀胱をいっしょけんめいにふくらませている。彼女はいっぱい空気を入れてから、少しずつ空気を抜き、「プブー」と鳴る音を楽しむのである。また右手でその皮をこすりながら、「キキ」と鳴る音を面白がる。またふくらませた皮袋で、友達の背中をたたき、その時の弾力度を喜んだりする。ほかに膀胱を藁の茎や葦に結んでふくらませ、後から紐でしっかり結んで、ゴム風船のように高く上げる遊びも流行した（図13）。

この遊びは古くから知られていて、十六世紀のガイラー・フォン・カイザーベルクの詩にもこう書かれている。

「豚を屠殺すると、

悪童たちは膀胱をとり、

それをふくらませ、その中に

三、四個の豆を入れ、音を立てる。

彼らはベーコンよりは豚の膀胱の方が好きなのだ」<sup>註9</sup>

十九世紀初期の銅版画（図14）にも、風船ごっこの子供についてこう記されている。

「愉快にふくらませよ、

ほっぺを丸くふくらませて。

わたしは豆入り風船がこわくて、

逃げたりはしない、と

妹のクララちゃんがいった。

ピート兄ちゃん。ダメダメ、

あんたはまだ私を知らない」。



図14 「風船遊び」トンプソンの「子供の遊戯」  
の版画 No.127 オランダ 19世紀初期

単に遊びを描写したのではなく、教訓画に適用している例として、十七世紀のアドリアン・サードラの月曆版画「十二月」やコンラット・メイヤーの「子供の遊戯」(図15)がある。後者の画面では、大人たちが台の上で屠殺した豚を解体している。

その側で、子供が摘出されたばかりの膀胱をふくらませている。なお愉快なのは、一頭の豚が自分の運命を予



図15 コンラット・メイヤー「風船遊び」,  
「子供の遊戯」より1657年

期してしょんぼり立っていること、遠景で膀胱の風船を犬の尻尾しっぽにつけて、追いつめず子どもの姿であろう。そこには「この愚かな子供のように、わたしたちも時どき風を掴む」という教訓が記されている。

同じく十七世紀のオランダの詩人カッツは屠殺の季節を待つ子供の気持を、人びとへの教訓に寓意化している(図16)。とくに以下に引用する詩の後半に留意すべきで



図16 E.シリマン「風船遊び」(カッツ『結婚について』1642年より)銅版画

あろう。

「子供は長い間待っていた、

そして何度も何度も考えた、

いつ屠殺の時期がやって来て、

牛（の膀胱）をふくらませることができのかと。

だけど彼の目も、その思いすべても、

牛の肉をみてはいなかった、

子供は自分の食物については考えていなかった。

しかし長い時間の屠殺の大騒ぎも、

（子供にとっては）実に、ただの膀胱のためなのだ。

今や（膀胱に）いっぱい空気を入れ、

子供はその中に喜びを見出す。

しかし一回だけ、小さな針で突ついたらなら、

まるくふくらんだものもすぐベチャンコになる。

世の中には虚栄心の強い人が大勢いる。

彼は快楽とあらゆる希望をもち、

誰かが、

その人生を終えるのを待っている。

それは財産を分けるためではない、

彼はそんな性質の人間ではないから。

彼がわずかばかりの風、つまり小さな利益を得るため

なのだ。

何か知らん、わずかな榮譽、

それもとくに見かけだけの榮譽のために。

ああ、人間とすべての奢侈よ、

それは一夜だけのものにすぎないのだ。<sup>注10</sup>

カッツはこうして、食用の肉のことはどうでもよく、

もっぱら豚や牛の膀胱のみを玩具の対象と考えている子

供、しかも空気をふくらませ、大きくなった風船を喜ぶ

子供を諷いながら、実は虚栄心の強い大人の行為を喻し

めているのである。

## 27、尻餅させる Bofkonten (図17)

通常の遊びでは、二人またはそれ以上の少年たちがひとりの男の子の腕と脚をつかみ、何度も地面、ベンチ、テーブルの上にその子の尻をぶつけたたり、投げ落とす。

体を曲げた別の男の子の上に落とすこともある。これは多く、ゲームで負けた子供への罰として行なわれた。ブリューゲルの絵でも、手足をつかまれた男の子は、重い梁の上に落されるため、恐怖の表情で身をかたくしている。他方六人の子供たちは愉快そうに悪ふざけを続けている。とくに左腕をとっている白い紙帽子の男の子は、何か掛声をかけて仲間の大將のようである。



図17 ブリューゲル「尻餅させる」  
（「子供の遊戯」の部分㊦）

## 28、牡山羊、牡山羊よ、しっかり立て

**Bok, Bok sta vast (図18)**

27番と同じ梁の上に、第一の男の子が腰を下ろし、両手をお腕の形になるようひざの上で合わせる。その上に第二の赤い帽子の男の子が顔をのせ、身体を曲げる。第三の男の子は両腕を第二の男の子の腰に回わし、同じようにする。こうして牡山羊となった二人の上に、さらに



図18 ブリューゲル「牡山羊、牡山羊よ、しっかり立て」  
（「子供の遊戯」の部分㊧）

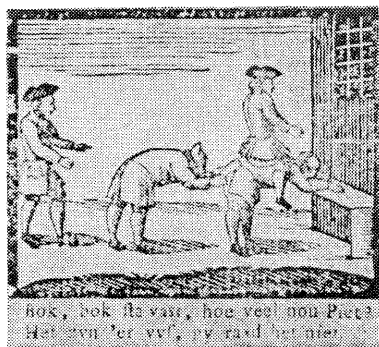


図19 「牡山羊よ、しっかり立て」J・ウェンデル  
の「子供の版画」No. 24 19世紀前期



図20 マルテン・ド・ヴォス「牡山羊よ、しっかり  
立て」(1610年頃ド・ブライン発行)銅版画



図21 「牡山羊よ、しっかり立て」オランダタイ  
ル画 17世紀中期

第四、第五の男の子が馬乗りになる。まず騎手になった  
第五の男の子が、頭上に指の角をたて、「しっかり立て  
よ、牡山羊君、僕の頭に何本の角があるかい」と聞く。  
もし先頭の山羊君がその数を云い当てたら、騎手と山羊  
は交代になる。ここで面白いことは、山羊役の子供が体  
を揺らし、振り落そうとすることである。十九世紀前期  
のオランダの版画(図19)に「牡山羊、牡山羊、しっかり  
立て、ピエト、何本あるかい。そこに5本あるよ。あ

あ当たらない」という可愛い詩が添えられている。  
この当てごっこには種々のヴァリエーションがあり、  
他にポピュラーなものとして、「ハンマー、はさみ、ナ  
イフ、スプーン、フォーク、桶のどれか」(図20、21)  
というもの。その場合、こぶしがハンマー、人差し指と  
中指がはさみ、人差し指のみがナイフ、掌に窪みを作っ  
てスプーン、三ないし四本指(親指以外)でフォーク、  
両手を合わせて桶を表わす。ほかに「肉切り庖丁(手を



図22 「牡山羊よ、しっかり立て」（ルーマー・フィッシャー『寓意人形』より、1614年）銅版画

水平に立てる）、スプーン、目がね（親指と人差し指で目がねを作り、のぞく）、はさみか<sup>註11</sup>という聞き方もある。ブリュッゲルの絵で、第五の男の子が左手を掲げているのは、おそらくこの中の「スプーン」を意味しているのではないだろうか。十六世紀のフランドルの辞書編纂者キリヤーン（一五七四年）によると、十種類の呼び名があったという<sup>註12</sup>。「お聞きよ、若旦那さん、私は上手に馳けますか」Koekoek heerken rijd' ick wel? 「牡山羊が柵

を乗り越えて逃げる」Book over haghe spelen 「牡山羊いっこ」boeken spelen 「牡山羊の上に乗る」boeken setten 「牡山羊の角いっこ」bock-horen spelen 「牡山羊の流し目いっこ」blick-spel spelen 「小馬を駆く」peerteken wel bereydt 「いっこいっこいっこ」kievel-kavel spelen 「指遊び」vingher-spel spelen 「ジャンク、オリまたはグラーフ」pick olie oft graef（いずれも農具の名に関係し、ピックは鍬の意味で、騎手は一本指を示す。オリの意味は不明だが、二本指を出すのでおそらくレーキ、グラーフはシャベルで手を突き出し、掻く動作をする）など。

十七世紀のルーマー・フィッシャーの『寓意人形』（図22）では、三人の男の子が組になって遊び、騎手役の男の子は人差し指を立てているから、「ナイフ」を意味しているであろう。版画にはセネカの「われわれはここギリシャの場所にいる」を引用し、さらにこう記されている。

「ひとがここで十分に理解できることは、僭主の傲慢や

幸運も不安定でくずれやすく、つねに隣国の君主や抑圧された臣下の手中に握られていることである。後者は主君を背にのせながら、どんな風にして思慮のない僭主を突き落とすことができるかを考え、叛乱のチャンスをねらっている……」<sup>注13</sup>つまりこの地上の為政者に対して、権力の存在は不安定で偽瞞的である、ことを知らせている。

## 29、お店屋さん Winkeltje houden (図23)

画面の前景右端で、白い帽子の女の子がお店屋さん



図23 ブリューゲル「お店屋さんごっこ」  
 (「子供の遊戯」の部分②)

っこを興じている。彼女は、27、28番と同じ梁を台に使っている。商品は赤レンガを削り、粉にして計売りをしたり、紙を三角形にして、一袋単位で売ったりする。彼女の近くに「ストック」としての別のレンガがある。また手前に一個のレンガが置かれているのは、店のしるし、それとも扉を意味するのであろうか。計りは小さな木の椀二個に紐を通して作ったもの。小石が重りの役割をする。商品となるものはレンガの粉を削った高価な香料サフラン、また床の装飾用の白粉を小麦粉、すいば(酸葉)の茎をお菓子、湿った砂を型押しに入れてパンやクッキー、どんぐりや桜んぼうの種、漆喰の小片で棒砂糖、レンガのかからでボンボン、炭でオーヴン用の石炭とした。お客さんは瀬戸物の破片を硬貨代わりとする。とくに無地の破片は小銭、花のついたのは銀貨とみなされた。破片の大きさや美しさに、お金の価値が定められたのである。<sup>注14</sup>

この「お店屋さんごっこ」は主として女の子の遊びとされ、彼女たちは通常、机の上とか開かれた窓の棧を台

として遊んだ。

ガイラー・フォン・カイザーヘルクはこの遊びをこう叙述している。

「子供たちは互いにやさしくし、サフランを作り、着色された香料とか、甘い香料、生姜、そしてレンガを割り、粉を作る。それから小さな家を作り、料理をする。夜になると、それは終りとなり、倒してしまふ」。

(東京工芸大学)

*Das Deutsche Kinderspiel im Mittelalter*, Innsbruck

1873, p. 23. から引用。

注 7 R. Visscher, *Zonne-poppen*, Amsterdam 1914.

注 8 Jacob Cats, *Kinderspel*, Saint-Omer 1855, pp. 74-76, 原書 *Huuzeluck*, Amsterdam 1625.

注 9 Kaisersberg, *Brösamlin*, 45 Zingerle, *op. cit.*, p. 49. から引用。

注 10 Cats, *op. cit.*, pp. 26-30.

注 11 「牡丹羊子」の「なりやう」の「なり」は以下の文献を参照。De Meyer, *op. cit.*, p. 5. Hills, *op. cit.*, pp. 18-19. G. Hartmann en E. Kems, *Hetê Jôh!*, Amsterdam 1976, p. 54.

注 1 Victor de Meyere, *De Kinderspeken von Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 4.

注 12 C. Kilian 216 217 218 Jan Puijs, *Kinderspeken op tegels*, Assen 1979, p. 108 から引用。

注 13 W. P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel vóór de Zeventiende Eeuw* (Dissertation, Leiden, 1914), p. 135.

注 14 Drost, *ibid.*

注 15 C. G. Stridbeck, *Bruegelstudien, Untersuchungen zu den ikonologischen Problemen bei Pieter Bruegel d. Ä.*, Stockholm 1956, pp. 189-190. Visscher, *ibid.*, p. 160.

注 16 Joost van den Vondel (1587-1697) の詩 Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspele* 1560, Wien 1957, p. 16 から引用。

注 17 Cock en Teirlinck, *op. cit.*, Band I, pp. 294-308.

注 18 Geller von Kaisersberg, *Erneis* (1516) 45 V. Zingerle,

注 19 Kaisersberg, *Brösamlin*, 1517 (J. Pauli の解説), Bd. XII.

(続へ)



「周郷博先生追想集」に

寄せて

村 石 京 子

周郷先生が亡くなられて、この三月で二年の月日が流れました。正確に言えば、五十五年二月二十八日に先生は逝かれたのですが、四谷のイグナチオ教会で最期のお別れをしたのが三月一日のことなので、三月という月がめぐりくると、春の訪れを感じる前に、「あ、この月の始め、春の来る前に周郷先生は亡くなられたのだ」という思いが胸の中一様にひろがってしまいます。前日二月二十八日も先生の死をつたえるように寒い、心の芯の冷えるような日でしたが、あの日三月一日も灰色でした。教会でのミサが終り、お別れの献花をして外に出ると、それまで辛うじて支えられていた思いが一度に噴出した

ような大粒の雨と、荒れ狂った風に傍然と立ちつくしたものでした。周郷先生とのお別れを悲しむ人々の心が一かたまりになってあんな雨を降らしたのか、俗人で先生の気持をわかってくれない人達に対して先生の憤りが嵐をよんだのかしらと驚いたものですが、そのようなことを言えば、「だから貴女はまたつまらないことを言う」と先生に叱られそうにも思います。そんなことがまざまざと思い出されるのに、もう二年の月日が流れてしまいました。

でも不思議なことに、周郷先生の思い出は月日が経っても少しも薄れず、いや月日が経つ程、色濃く私の中によび起こされてまいります。そしてただ、なつかしい思いで一杯になるのです。

学生のときは、教育社会学の講義でしたが、時間になっても待っても待ってもいらっしやいません。私達は口ではぶつくさ言いながらも、他の先生のとくには考えられない程辛棒強く、先生がいっしや

るのを待ちました。「もういらっしやらないわよ」「また休講か」などと言いながらも、みんなは若しかしたらと期待していたのです。そして本当に先生が現われて、風呂敷包から本を数冊出されて「ハーバート・リードのね」とか、「今、来る途中で思っただけだね、この頃の日本人で疲れてるね」などと口を開かれると、もう今までの不満顔はどこへやら、一生懸命話をうかがうのでした。

先生は講義をなさるときは、あまり大きな声でなくボソボソと、それでいて一言一言かみしめるように話されるので、自然とひきこまれていきました。また、詩をよくよんで下されたものですが、そのときはとてもはっきりとした口調でした。さらに、歌をうたわれるときは、あれ／と思う程大きな声で、そして美しい音程でうたわれます。私達は、周郷先生の歌が大好きでした。「金髪のジェニー」をきれいな声でうたわれたり、「ぞうさん」のうたがいいね、二番の『あのね かあさんが好きなのよ』とこ

ろがいいんだよね」と言われたり、「里の秋」の『栗の実煮てます いろりばた』のところが好きだな」と言われてうたわれたり、私どもも一緒にうたったりしたものです。『赤とんぼ』のうたや、先生の作詩された「くもさん」のうたもよくうたって下さったので、思い出すと今も先生の声がかきこえてくるような気がします。

附属幼稚園の園長先生としてお迎えしての四年間には、その頃先生の心を占めておられたティヤール・ド・シャルダン、シモーヌ・ヴェイユ、そして服部（ブッシュ）孝子さんのこと、矢沢宰君のことなど、折々にいろいろかがいました。ただ、私たちは毎日の保育に精一杯なために時間的に先生とかみ合わなかったり、いつでも先生にお目にかかれるという甘えの気持があつたために、今考えればもっと大切にすべきであつた日々を時の流れにのせてしまったようなところもありました。それにしても短いようでも四年間は長く、いろいろなことがあります

きてここには書くことが出来ません。書けば、何かしら虚しく、ばらばらと音を立てて飛び散ってしまいそうな気がするのです。

そんな気持ちで周郷先生の思い出を心の中であたためているこの頃、心待ちしていた「周郷先生追想集」が出来上がり、送っていただきました。まず手にして表紙を見たたん、胸がじーんとしてしまいました。先生がこよなく愛された秦野の緑の中で、オルガンを弾いていらっしやるのです。それは静かな美しい絵物語でした。そして頁をくると、よくまあこれだけ大勢の方々が、と驚く程の多方面の方達が周郷先生の思い出、先生とのふれあい、自分の中にある周郷先生について書いておられるのです。そしてそれが一冊のまとまったものとして、生き生きとありし日の先生の姿をえがき出しています。

先生によって教育とは何かを知りました。そして心の豊かさ、心の暖かさ、美しさ、優しさ、哀し

さ、寂しさ、厳しさ、いえもっともいろいろなものをいろいろな形で教えていただきました。純粹なもの、真実を見る眼、愛などにふれることも多くありました。夫々の人が、夫々の体験を通し、感じ、味わったのです。そして先生とのふれあいによって生まれたものは、時が経っても決して消えてしまふことなく、むしろ大きく育っていることを追想集の一頁ごとに感じるのです。

追想集は赤間峰子さん（以前に「幼児の教育」の編集をしておられた方です）はじめ、大勢の方々の御苦心によって、このような立派なものとして結実しました。本当に嬉しく思います。周郷先生もきっと、ちよっとテレくさそうにながらも、優しく喜んでいらっしやることと思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）  
☆「周郷傳追想集」（送料共三千元）を御希望の方は、左記へお問い合わせ下さい。  
かど創房 門馬正毅 〒343 越谷市大成町八一二五二〇—  
四四 TEL・〇四八九一八二一八八〇〇

# 『幼児の教育』復刻記念懸賞論文審査発表

最優秀賞の該当者がなく、左記の二人に優秀賞を贈り、その他四人の方々に奨励賞として選出いたしました。

## ☆優秀賞（各賞金十万円）

○「生活主義保育の源流」

金子真知子

○初代編集者東基吉を通してみる「幼児の教育」創刊の時代

国吉 栄

## ☆奨励賞（各賞金三万円）

○戦時体制下の幼稚園に関する考察

——「幼児の教育」誌にみられる保育実態を中心に——

松本 園子

○私の幼児教育観

大槻 啓子

○倉橋惣三の短信（三）「保姆諸君と園芸趣味」の記事から「自然と幼児教育」

との関連について考察する

小坂田玲子

○運動機能の発達と知能発達の一考察

松江 茂子

幼児の教育 第八十一巻 第三号

三月号 © 定価二七〇円

昭和五十七年二月二十五日 印刷  
昭和五十七年三月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

○本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

# 実践記録を通し 保育の見直しを！

## 自由遊び再発見

**新刊**

自主性のある子ども、意欲  
のある子どもを育てる!!

子どもの自由感と自己充実感を保障し、子ども自らが考え、行動することを、時間をかけて育てるという“自由な”保育が最近見直されています。本書は、その具体的な実践のあり方を、やさしく、わかりやすく説いたものです。文字や数を“教える”ことよりも、もっと大切なものは何か、幼児教育の原点について本書と共に考えてみませんか。

野辺繁子・矢作邦子共著・B6判・288頁・定価1,200円 千250円

## 私の保育どこが問題？

“よい”保育の中味をもう一度見直してみませんか？

子どもに困難なことはさせない。できるだけ楽に、嫌なこと、考えること、力のいること、などは全部保育者が先回りしてやってあげる。準備も完全。仕事もテキパキ。一見やさしいよい先生です。ところが「それでは子どもがダメになる」と言われてビックリ。保育日誌をもとに「ここが問題」と指摘された中から、特に参考になるものをまとめました。

本吉圓子・笠間典美共著・B6判・304頁・定価1,200円 千250円

# 伝統あるフレーベル館の8大月刊誌

— 57年度は、内容がさらに充実しました。 —

## ①—情操

### キンダーブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めます。

(ワイド画面) 団体購読価 200円

## ②—観察

増頁しました!!

### キンダーブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいの観察絵本です。

(ワイド画面) 団体購読価 250円

### しぜん-キンダーブック ③

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 300円

### キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、“夢とゆとり”が生まれるよう配慮されています。

(厚紙製本) 団体購読価 200円

### キンダー おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返して読んで楽しめます。

(上製本) 団体購読価 300円

たのしい がくしゅう

### お お ぞ ら

子どもの知的欲求に応えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

(総合絵雑誌) 団体購読価 300円

創刊

### ころころえほん

園生活で初めてふれる、3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 200円

### 保育専科

— 今月のカリキュラム —

先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定価 350円 (翠蘭6,900円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館